

# 琴

三浦每生

「あらすじ」

中澤琴、天保15年（1844）、上州利根郡上原村生まれ。幼い頃より、今は亡き父から、兄良之助とともに剣の手ほどきを受ける。文久3年（1863）、琴、19歳。庄内藩士清河八郎による浪士組結成の隊員募集を受けて、兄良之助とともに上京、浪士組に参加する。しかし、発足当初の浪士組は無宿者やごろつきどもの集まりであった。琴はごろつき一味に辱めを受けて以来、男装で剣の修行を始める。

同年、清河八郎が暗殺されると、浪士組は庄内藩預かりとなり、「新徴組」と名を改めた。新徴組は、同じ浪士組から派生した新撰組に比べて知名度は劣るが、幕末の江戸の治安を一手に引き受け、毎日江戸市中を巡邏し、「お巡りさん」として親しまれたのである。西の「新撰組」と東の「新徴組」は、崩れゆく幕府を支えていった。そんな琴にはどうしても勝ちたい相手があった。薩摩藩士・高良大志郎である。元浪士組隊士で、かつては憧れの存在であったが、求める理想が相違して、高良は浪士組を出奔した。薩摩の尖兵として現れた高良は、御用盗騒動、薩摩藩邸焼討事件、開戦前夜の秋田久保田藩、そして庄内戊辰戦争最後の激戦地、越後口・関川村と、先々で琴の前に立ちはだかる。

高良が求める正義、琴が追い求める真実。しかし、二人は決して混じりあうことなく、力と力は衝突を繰り返す他はない。やがて、二人に最後の対決のときが来る。

琴は、武士という男たちの世界の中で、女であることを背負い、女であるがゆえに誰よりも強くあろうとした。兄や新徴組の仲間たちの生死を乗り越えて、時代を生き抜こうともがいた。

これは、そんな激動の時代を生きる一人の女剣士の物語である。庄内藩降伏の後、琴は故郷の上州に戻る。強くて美しい琴に、求婚者は後を絶たなかったが、

「自分より弱いものには嫁がない」と宣言し、ついには生涯独身を通し、昭和2年（1927）、親類縁者の見守る中、琴は波乱の生涯を静かに終えた。

享年82。

主な登場人物（年齢は初登場時）

中澤琴（19） 本作の主人公。新徴組隊士。美しく腕が立つ。  
中澤良之助（22） 新徴組隊士。琴の兄。妹思い。  
中澤みね（60） 琴の母。

【新徴組】

中川一（30） 新徴組隊士。六番組肝煎（隊長）。  
中川かつ（19） 一の妹。新徴組の雑用をこなす。琴と仲が良い。  
祐天仙之助（35） 新徴組隊士。元上州の博徒。  
伍平（28） 新徴組隊士。祐天の子分。  
柴八（33） 新徴組隊士。祐天の子分。  
軍次（24） 新徴組隊士。祐天の子分。  
大村達尾（22） 新徴組隊士。祐天を親の仇とつけ狙う。  
儀助（48） 新徴組屯所の下男。  
大熊敬助（28） 新徴組隊士。庄内では琴や中川らと暮らす。  
玉城織衛（45） 新徴組剣術指南役。琴の剣の師である。  
林茂助（45） 新徴組統括。庄内戊辰戦争時には新徴組大隊長となる。  
山田官司（34） 新徴組副長格。庄内戊辰戦争時には決死隊隊長となる。  
その他隊士たち（相原倉吉、古屋常三郎、小倉宗次郎など）

【庄内藩】

長峯栄之進（26） 庄内藩士。琴に惚れている。  
松平権十郎（23） 庄内藩家老。新徴組の総取締役。  
菅実秀（38） 庄内藩執政。権十郎の補佐を勤める助役。  
石原倉右衛門（40） 薩摩藩邸討入の総大将。  
安倍源蔵（46） 薩摩藩邸討入の参謀格。  
酒井玄蕃（29） 庄内藩重役。のちに第二軍大隊長。通称「鬼玄蕃」。  
酒井兵部（41） 第三軍大隊長  
水野藤弥（38） 第四軍大隊長。  
酒井忠篤（50） 庄内藩主。  
八兵衛（63） 鶴岡・湯田川温泉で琴らが寄宿する農家の主人。  
つん（62） 八兵衛の妻。  
庄内藩士たち

【薩摩藩】

高良大志郎(25) 元浪士組隊士。のちに薩長軍の小隊長となる。琴の憧れの相手であり、最大の敵でもある。

大竹平太郎(30) 元浪士組隊士。御用盗騒動時の鉄砲隊隊長。

篠崎彦十郎(47) 薩摩藩家老。江戸藩邸留守居役。

大山格之助(47) 薩摩軍参謀。のちの県令・大山綱良。

西郷隆盛(44) 薩摩軍総大将。

薩摩藩士たち

【仙台藩】

山内富治(19) 仙台藩使節。久保田藩で琴と知り合う。好青年。

志茂又左衛門(48) 仙台藩使節代表。

仙台藩使節たち

【その他】

浪人勝次

浪人与平

浪人三郎

偽薩摩侍たち(浪人ア、イ、ウ)

居酒屋のおかみ

花の少女

久保田の茶屋の婆

久保田の居酒屋の親父

久保田の刺客たち

矢島の木こり

貞九郎

貞九郎の母(中年妻)

貞九郎の父(中年夫)

琴子

○タイトル「琴」

○江戸・往来

江戸の街。人々の往来。賑やかな正月の風景にクレジット。

T「文久三年 江戸」

一人の町娘が子犬の鼻を撫でている。

中澤琴（19）である。刀袋を懐に抱えている。気持ち良さそうな子犬。

声「どけ！どけ！」

駆けてくる浪人が三人。手には抜き身の刀。火事装束の男たちが追いかける。琴、すつと立ち上がると路地に消える。

○路地

浪人たち（勝次、与平、三郎）がくる。

と、琴が前に立ちふさがる。

勝次「小娘、邪魔だ！」

琴、動かない。

勝次「どかんと怪我するぞ！」

琴、刀袋から刀を取り出す。身構える

浪人たち。琴、構える。木刀だ。

与平「おい、嬢ちゃん、冗談よしな！」

三郎「ちゃんばらごっこじゃねえんだよ！」

進み出た与三郎の腕を木刀で打つ琴。

琴「やった！」

勝次「！ てめえ、ふざけるな！」

浪人たち琴に斬りかかる。琴、身をか

わす。が、着物の裾が絡んで転ぶ琴。

勝次「くたばれ！」

と刀を振りかぶった勝次。

と、勝次がうっと呻いて崩れ落ちた。

斬ったのは、火事装束の高良大志郎

（25）だ。その脇を駆けてくる、同じ

く火事装束の中澤良之助（22）。

良之助「（琴を抱きかかえて）琴、お前、な

にやっつてんだ？」

琴「……イタタ」

子犬が来て、琴の傷口を舐める。

高良、無言のまま踵を返す。

○ 本所・浪士組屋敷・座敷

組隊長の中川一（30）が怒りの表情。  
統括の林茂助（45）と肝煎（隊長）の  
山田官司（34）が困ったように腕を組  
んでいる。目の前の琴（娘姿）が、す  
つと書状を差し出す。

中川「一体なんのつもりだ、これは！」

山田「取り上げて見る。汚い字で「た  
ん願書」と書いてある。」

山田「たん、がん？　しょ、か、これは」

琴「私を捕り方に加えていただきたく……」

山田「しかしまた汚い字だのう」

琴「！（恥ずかしくて、うつむく）」

林「その意気込みは頼もしいが、そなたは女、  
腕も未熟、その上役目も守れんのでは、隊  
士にしてやれるわけがない。ちつとは慎め」

山田「しかし、これはひどいのう……」

琴「山田から嘆願書をひったくる。」

○ 同・廊下

琴がしおれて出てくる。

嘆願書をくしゃくしゃと丸める。

外で待ち構えているのは中川一の妹の  
中川かつ（19）である。活発そうな娘  
で、いたずらっぽく微笑んでいる。

かつ「ことちゃん（とニヤニヤして）」

琴「（バツが悪そうに）かつ殿、悪趣味です」

かつ「（笑って）この簪みて、私には地味だ

けど、琴ちゃんに似合うと思うの」

琴「そんなもの興味ありません」

琴、プイと去っていく。

○ 同・道場

男たちが激しく剣術の稽古をしている。

中でもひとときわ激しく打ち合うのは、

剣術指南役の玉城織衛（45）と高良で

ある。良之助がじつと見入っている。

琴が入ってきて、良之助の側に座る。

良之助「（見て）ちつとは反省したか」

琴「兄上には言われたくありません」  
と、高良が玉城から一本取る。道場がどよめく。

琴「私もあんな風に稽古しようございます」

良之助「稽古なんか、俺がいつでも……」

琴「（かぶせて）兄上じゃ不足です」

良之助「どうして」

琴「私は一度勝ちました」

良之助「あれは酔っ払って油断しただけだ」

琴「負けは負けです」

と、隊士大竹平太郎（30）の声がする。

大竹「なんじゃ、なんか白粉臭いと思ったら、

女が紛れ込んだぞ！」

男たちが笑う。

良之助「いたたまれない琴。」

玉城「（怒鳴って）お前たち、やめんか！」

琴、道場をそそくさと出て行く。

○ 同・中庭

琴、ため息をつく。

と、向こうでガラの悪い男たちがチン

チロリンをしている。祐天仙之助（35）

とその子分の伍平（28）、柴八（33）、

軍次（24）である。伍平が琴に気づく。

伍平「兄貴」

祐天「（見て）よお、お嬢、一人か」

琴、うなずく。

祐天「しようがねえなあ。じゃ、また俺たち

が相手してやるよ。おい」

伍平たち、あからさまに迷惑そうに。

○ 同・廊下

高良が庭先を凝視している。

その先では伍平たちと琴が剣術の稽古

をしている。祐天が酒を飲みながら笑

っている。伍平たちがヘラヘラと、琴

をおちよくる。琴だけは真剣だ。

と、良之助がやってくる。

高良「（良之助に）あれは貴様の妹か」

良之助「（見て）あいつ、あんなところで」  
高良「身内ならしっかり見張っとけ！」

良之助、驚く。  
高良、去っていく。

○ 同・道場（夜）

誰もいない道場。

琴が素振りをしている。

ふと、気配がして振り返ると、そこには高良が立っていた。

琴「申し訳ありません（出て行こうとして）」

高良「剣術がしたいか」

琴「：：はい！」

高良「稽古をつけてやる」

琴「（信じられない）」

高良「どうした。構えろ」

琴、構える。

と、高良、稲妻のような打ち込み。  
琴、あつという間に吹き飛ばされる。

高良「どうした」

琴「いえ！」

琴、立ち上がる。と、高良の怒涛のよ  
うな攻め。琴は立っているのが精一杯  
だ。高良は、琴の身体中を打つ。

琴、思わず声をもらしてしまう。

高良「どうした！ 打ち込んでこい！」

琴、再び転倒する。起き上がれない。

全身が崩れるように痛い。

高良「ならば、これまでだな」

琴、立とうとするが、立てない。

高良「分かったか。女に剣は不要だ。すぐに  
田舎に帰れ」

高良、道場を出て行く。その足音。

○ 同・道場・日替わり

男たちが剣の稽古をしている。ひとき  
わ厳しく稽古をする高良。琴が道場の  
外からその様子を眺めている。

かつが通りかかる。

かつ「（琴のあざを見て）琴ちゃん？」



琴、そそくさといなくなる。

○ 同・中庭

琴がぼんやりと庭を眺めている。

伍平、柴八、軍次が琴を見つけて、何

やら目配せをする。

軍次「中澤、ちよつといいか」

琴「（見る）」

伍平「頼みたいことがあるんだ」

○ 同・裏手

琴を囲むように、伍平と軍次。柴八は

辺りを警戒するように目を配っている。

琴「軍資金、ですか」

軍次「清河八郎殿直々のご命令でな、祐天の

兄貴にも内緒の任務だ」

琴「どうして私に」

柴八「お前の腕が買われてるんだ」

琴「（嬉しく）で、私は何を」

伍平「難しいことはない。少しの間、見張り

に立っててくれればそれでいい」

○ 夜

月が輝いている。

○ ある商家・表・夜

黒い装束に身を包んだ伍平、柴八、軍

次。琴は娘姿に御高祖頭巾である。

伍平、琴に呼子を渡す。

伍平「役人が来たらこれを吹け」

琴、不安そうにうなづく。

伍平たち、屋敷に忍び込んでいく。

○ 月

月を雲が覆い隠していく。

○ ある商家・表・夜

手持ち無沙汰で立っている琴。

と、屋敷の中から、女の悲鳴。

琴、ハツとする。

静寂。  
琴、屋敷の中へ入っていく。

○ 同・廊下・夜

真つ暗な邸内を恐る恐る進む琴。  
廊下の先に、ほのかに明かりが見える。  
障子の隙間から、中を覗き見る琴。

○ 同・座敷・夜

軍次が男を一刀の下に斬り捨てる。  
男の手にあった小判がジャラジャラと  
流れ落ちる。

○ 同・廊下・夜

琴、思わず後ずさる。と、立てかけて  
あった衝立にぶつかる。  
ガタンと音がする。

琴、持っていた呼子を落とす。  
琴、恐ろしくなって逃げ出す。

と、座敷から柴八と軍次が出てくる。  
柴八、床の呼子に気づいて拾い上げる。  
座敷の奥から伍平も出てくる。

伍平「何の音だ」

柴八「（伍平に）おい（と、呼子を見せる）」

伍平「（舌打ち）」

伍平たち、駆け出す。

○ 同・庭・夜

琴が飛び出して来る。  
後から追いかけてくる足音。  
琴、裏口の方へ駆けていく。  
伍平たち、琴が逃げた方へ走る。

○ 夜道

琴が逃げる。  
後から伍平たちが追いかける。

○ 神社境内・夜

逃げてくる琴。が、下駄の鼻緒が切れ  
て転んでしまう。

伍平「見たな」

琴「あれが役目なのですか」

軍次「役目なんて、そんなもんはねえよ。て

めえの小遣いはてめえで稼げつてのが俺た

ちの決まりでな」

柴八「どうする」

伍平「誰にもいえねえようにしてやる」

這って逃げ出そうとする琴を、三人が  
かりで押さえつける。

琴「誰か！ 誰か！」

伍平「おい！」

柴八、琴の口を手で塞ぐ。琴、抵抗し  
て柴八の指を思い切り噛む。

柴八、思い切り琴をひっぱたく。

琴「誰か！ 誰か！」

伍平「静かにさせる！」

柴八、琴の首を思い切り締める。琴は  
抵抗するが、やがて、ぐったりする。

裾がはだけて白い太ももが露わ。

伍平たち、互いに顔を見合わせる。

○ 月

雲が晴れていく。

○ 神社境内・夜

逃げていく伍平たち。

ぼろ雑巾のように投げ捨てられた琴の  
身体を青い月明かりが照らしていく。

琴、ゆっくりと起き上がる。

琴、無言で衣服を直し、立ち上がり、

砂を払う。

一步。下腹部に痛みが走る。

が、琴、大きく息を吸い込むと、よろ  
けながらも、一步一步、歩き始める。

○ 浪士組屋敷・廊下・夜

玉城がやってくる。

道場に明かりが灯っている。

○ 同・道場・夜

琴が、神棚を見つめている。

玉城「誰が入ってくる。」

玉城「誰かおるのか」

玉城、琴のそばにやってくる。乱れた

髪、土に汚れた顔、引き裂かれた着物。

玉城、言葉がかけられない。

琴「（玉城に気づいて）申し訳ありません

（と出て行くこうとする）」

玉城「待て：：構わん」

琴「（黙って頭を下げる）」

琴「しばしの静寂。」

琴「御指南役殿」

玉城「：：どうした」

琴「（ふと）女は強くなれぬのですか」

玉城「：：そんなことはあるまい。母はいつ

の時代でも強いものだ」

琴「そういう強さではありません。女でも男

のようには強くなれるのかと：：腕っ

玉城「お前は強さを履き違えている：：腕っ

ぷしの強さなど、たかが知れている。強さ

は、生きる力だ。それには男も女もない」

琴「：：」

玉城「強くなりたいたいと思う強い意志があれば、

必ず人は強くなる。それだけだ」

琴、ジッと考えている。激しい思いが

胸に込み上げてくる。

琴「（玉城に頭を下げて）私に、どうか、ど

うか剣を教えてください！」

琴、玉城の目を見る。そのしがみつく

ような必死な目。

玉城「一つだけ忠告しておく。人を斬ると言

うことは、まず己を斬ると言うことだ。お

前にその覚悟があるか」

琴、玉城の顔をじっと見つめる。その

目から涙が溢れてくる。後から、後か

ら、ボロボロと、とめどなく。

玉城「明日の朝、道場に来なさい」

玉城、静かに道場を出ていく。

○ 同・琴の部屋・朝  
鏡の中に琴の顔がある。琴、長い髪を引っ掴む。髪にハサミを当てる。一瞬手が止まるが、やがて一思いにブツリと切り落とす。

○ 同・廊下・朝  
襟巻をした青年剣士にすれ違いかつ。しとやかに一礼。と、それが琴だと気づいて驚いて振り向く。

○ 道場・朝  
男たちが剣の稽古に励んでいる。そこに男装の琴が入ってくる。

良之助「（気づいて）琴：：その頭：：」  
琴「兄上、これでさっぱりしました」

道場の男たち、ざわつき始める。

高良が入ってきて、琴の姿に驚く。

玉城が入ってくる。

玉城「中澤琴、これへ」

琴「はい！（と、玉城の元へ）」

玉城「俺の稽古は、ちと、厳しいぞ」

琴「覚悟はできております」

玉城と琴、打ち込み練習を始める。

ぼかんと見ている良之助とかつ。

高良は諦めたように道場を出て行く。

○ 麻布・一ノ橋・夜

T「文久三年 四月十三日 麻布・一ノ橋」  
去っていく刺客たち。無残に打ち捨てられた男の死体。

○ 江戸・往来・日替り  
大竹ら数人の若者たちが狂ったように走り抜けていく。その必死な表情。

○ 浪士組屋敷・中庭  
琴が庭の鳥の巣箱に餌をやっている。  
小鳥が餌をついばんでいる。  
廊下を足音高く駆け抜けていく男たち。

パツと小鳥たちが飛び去っていく。

○ 同・広間

大竹「浪士たちがひしめいている。」

浪士1「清河八郎殿が討たれたのはまことか！」

浪士2「こも庄内藩に乗っ取られるらしい」

と、高良が立ち上がる。

高良「静まれ！」

男たち、興奮して鼻息が荒い。

高良「我らが清河殿についてここまで来たの

は何のためだ！ 食うためか、扶持をもら

うためか、違う！ 攘夷だ！ 今更卑怯で

腑抜けた幕府の犬に成り下がるか！」

興奮する男たち。

○ 同・部屋

琴が手習いをしている。

高良を先頭に男たちが廊下を歩いてく

る。琴、反射的に字を隠す。

大竹「おい、あいつはどうする？」

高良「琴をチラリと一瞥すると、その

まま通り過ぎて行ってしまふ。」

○ 同・座敷

林、山田、玉城、中川、良之助らが並

んでいる。向かい合う高良、大竹たち。

山田「我らは庄内藩の元でこれまで通り浪士

組を続けていくことに決めた」

高良、にじり寄って、

高良「どうして？ 今の幕府に大義はない」

玉城「浪士組は江戸の町を守るのが役目だ」

高良「御指南役殿、腐った幕府についており

ますと、貴殿の剣まで腐ります」

林「我らは幕府を腐っているなどと思つては

おらん」

高良「（せせら笑つて）ならば、好きにな

さるがよろしかろう」

と、高良たち立ち上がる。

○ 同・道場・夜  
琴が一人で稽古をしている。

高良「一人でやっておったのか」

琴「（以前よりは臆せず）何か、あったので  
すか？ 朝からみんな慌てて」

高良「……女は呑気だな」  
高良、道場を出て行こうとする。

琴「あの……」  
高良「（立ち止まり）なんだ」

琴「高良殿は何のために剣を学ぶのですか」

高良「（振り返って）それを聞いてどうする」  
琴「私は高良殿のように強くなりたいのです」

高良「正義だ。俺たちには正義がある」  
琴「正義？ ですか」

高良「女には分からなくてよいことだ」  
琴「教えてください！」

高良「無駄だ」  
琴「努力します。お願いします！」

高良「無駄だと言っておる！」  
琴「お願いします！」  
と、高良、壁に掛けてある木刀を掴む

と、切っ先を琴の喉元につきつけて、  
高良「ならば俺に勝てるか。俺に勝ったら教

えてやる」  
琴「……勝ちます！」  
じつとにらみ合う琴と高良。

○ 同・道場・朝

琴が居住まいをただしてじつと座って  
いる。道場には誰もいない。  
小鳥のさえずる声だけが聞こえてくる。

○ 同・部屋・朝

琴が入ってくる。部屋はもぬけの殻だ。  
琴、呆然と立ちすくむ。  
と、かつが通りかかる。

琴「か、かつ殿！ こ、この」  
かつ「薩摩人たちなら、夕べ遅く逃げ出した  
んだって……」

琴「！……」

○ 同・正門・日替わり  
行列をなして武士の一団が入ってくる。  
高張提灯が掲げられている。丸に片喰  
の紋。庄内藩酒井家の家紋。  
鹿毛にまたがり、颯爽と入場する若き  
家老松平権十郎（23）。  
傍らに徒歩で従うのは執政の菅実秀  
（38）である。

○ 同・大広間

浪士組の隊士が集められている。琴は  
一番後ろに座っている。  
正面に権十郎と菅が端座する。  
襖を少し開けてかつが覗く。

琴「（小声で）かつ殿！？」  
かつ「（シーツとジェスチャー）」

菅、傍らの若い侍、長峯栄之進（26）  
に目配せ。栄之進は正面に進み出て、  
懐から巻き紙を取り出し広げてみせる。  
そこに『新徴組』と書かれている。

権十郎「本日取締を仰せかつた松平権十郎  
である。これより浪士組は我が庄内藩の預  
かりとなった。名も『新徴組』と改める。  
一同、一層の活躍を期待する」

かつ「あ、栄之進を見て、  
素敵」

菅「取締補佐の菅と申す。早速であるが、文  
武両道の我が藩の慣例にならい、近く講武  
試合を行うことにあいなった」

男たち、顔を見合わせる。琴、「講武  
試合」という言葉に目を輝かせる。  
権十郎、末席の琴に目を留める。  
菅「（続けて）この国難の時にあたり、自ら  
の腕以外に頼るものはない。一同実力をも  
って隊士の地位を勝ち取られよ」

○ 同・道場



壁に講武試合の詳細が貼り出されている。男たちが群がっている。中川や良之助の姿もある。琴とかつがやってくる。琴、そこに立っている。私が出てよろしいのですか？」

良之助「（驚いて）おまえ、出るのか？」

かつ「琴が出るってよ！」と男たちが笑う。

栄之進「（かつを制して）貴様ら何を笑うか！ 菅殿が申された通り、男も女もなく、庄内藩は武を尊ぶ。あなた、名は？」

琴「中澤琴と申します」

栄之進「拙者から菅殿に申し上げておきます」

琴、頭をさげる。

かつが栄之進を頼もしそうに見ている。

○ 同・家老部屋

菅が険しい表情である。栄之進が談判をしている様子。

菅「栄之進、講武試合は村の祭りの腕試しとはわけが違うのだぞ」

栄之進「されど、菅様」

菅「女を試合に出すなど、無駄じゃ」

栄之進「無駄かどうかは、出てみねば分かりません！」

目をつむって聞いていた権十郎。

権十郎「出たいものは出せばよい」

菅「（たしなめるように）御家老」

栄之進「ありがとうございます！」

権十郎「私はあの者の剣が見てみたい」

○ 同・道場・日替わり

対戦表が貼り出されている。が、琴は複雑な表情。

祐天「お嬢」

祐天が伍平たちを連れてくる。

対戦表の琴の相手は、祐天だ。

祐天「まさかお嬢と対戦するとはな。手加減してやってもいいいぜ」

琴「（毅然と）無用です」  
祐天「威勢がいいな（と、豪快に笑う）」  
と、琴が向こうに一人の隊士・大村達  
尾（22）がこちらを睨みつけているの  
を見つける。大村は、琴と目が合う  
と、すっと向こうへ去っていく。

○ 同・道場

祐天の稽古を見ている琴。  
祐天は手を抜いている。必死な相手の  
剣を巧みにかわして、隙に打ち込む。  
玉城「祐天は無骨だが、実践を潜り抜けた見  
事な腕を持つておる」  
琴「（緊張して）……はい」  
玉城「しかし、恐れることはない。お前は、  
いつもの通りやれば良いのだ」  
琴「はい」  
玉城「ところで宣誓書は書いたか」  
琴「宣誓書、ですか」  
玉城「ああ、正々堂々戦いますという誓いの  
文（ふみ）だ。試合までに出さねばならん  
のだろうか？」

○ 同・部屋・夜

琴が必死に宣誓書を書いている。  
と、良之助が入ってくる。  
良之助「琴、文箱知らんか」  
琴、大慌てで字を隠して、  
琴「黙って入って来ないでください！」  
良之助「琴、顔色悪いぞ。あ、それ俺の文箱」  
琴「早くあっち行ってください！」

○ 同・玄関・日替わり

「講武試合」の看板が墨痕鮮やかに。

○ 同・控えの間

緊張した面持ちの琴。  
かつがおにぎりを持って入ってくる。  
かつ「食べる？」  
琴、黙って首を振る。

と、栄之進がやってくる。かつが楚々と襟を正してしとやかに控える。

栄之進「琴殿、まもなくです」

琴「栄之進殿、これを」

と、琴、栄之進に宣誓書を差し出す。

琴なりに精一杯綺麗に書いたのだが、

栄之進「（その字を見て）」

琴「（恥ずかしい）苦手なのです」

栄之進「（グツとくる）」

○ 同・道場

試合が行われている。

正面に権十郎と菅が座っている。

琴、入ってくると、祐天がくる。

祐天「望み通り、手加減はせん」

琴「はい！」

○ 同・道場・時間経過

係り「次の者が名前を読み上げる。

道場の真ん中に出てくる琴と祐天。」

良之助や中川、栄之進とかつたちが見

守っている。伍平たちもいる。

権十郎と菅、林、山田、玉城ら新徴組

の役付きたち、そして大村。

の役付きたち、そして大村。

琴と祐天、竹刀を交わす。

係り「はじめ！」

祐天、琴を試すように打ち込んでくる。

と、電光石火、琴が踏み込んで祐天に

肉薄する。一同息を飲む。

良之助「やった！」

驚く伍平たち、大村。権十郎、思わず

身を乗り出す。が、祐天はさすがに際

どいところで琴の剣を払った。

が、これで祐天の目つきが変わった。

祐天が猛攻を開始する。琴、なんとか

それを避ける。

琴は怯まず食らいついていく。

が、祐天は獣のように叫ぶと、さらに

激しく打ち込んできた。

玉城「いかん！」

祐天の突進を受けて、体勢を崩す琴。  
その隙に、祐天は抜き胴を決める。

係り「それまで！」

会場が静まる。と、どよめき。

良之助たち、残念がる。

祐天が琴に手を差し伸べる。

琴、少しだけ微笑む。

権十郎の満足げな顔。

○ 同・広間・日替わり

組替えの一覧が貼り出されている。

六番組の最後に「隊士心得 中澤琴」

とある。琴、嬉しそうに見ている。

祐天たちがくる。

祐天「隊士心得か」

琴「六番組にお世話になることになりました」

祐天「いつでもうちの組に來い。歓迎するぜ」

祐天たち、去っていく。

と、大村がまたこちらを見ている。

琴、近づくと、大村は慌てて飛び出し

ていく。

○ 居酒屋・夜

賑やかな店内。誰かを探すように暖簾  
から首を出す琴。

と、奥の席で一人酒を飲んでいる大村。

琴、大村の目の前に座る。

大村、驚いて席を立とうとする。

琴「逃げなくてもいいじゃないですか」

○ 同・時間経過

空いた徳利が数本。

大村は琴に目を合わせずに杯を重ねる。

琴「遠慮せず、飲んでください。今月からお

手当てをいただけることになりましたので」

大村「試合でお偉方の目に留まったか」

琴「見ておられたのですか」

大村「（立ち上がって）おかみ、勘定だ」

琴「ここは私が」

大村「いらん（と、財布を取り出すが、お金がない）。おかみ、ツケといてくれ」  
おかみ「とおかみが奥から飛び出してくる。とめて払ってくださいまし」  
大村「（困って）ではこの刀をカタに……」  
琴「（止めて）いけません。私が」

○ 屋台・夜

飲んでゐる琴と大村。屋台の親父が居眠りをしてゐる。

大村「田舎の母と妹に仕送りでな。塩が強くてもろくに米も取れない瘦せた土地さ……貴様、こんな話を聞きにきたのか？　そうではあるまい」

琴「私は何も」

大村「とぼけるな。何を探れと言われた」

琴「……祐天殿に、ですか」

大村「貴様、俺をバカにしているのか」

琴「私は真剣です」

大村「（立ち上がり）帰る」

琴「祐天殿にどんな恨みがあるのです」

大村「俺が、あいつに恨みだど？」

琴「貴方の目を見ればわかります」

大村「目だ？　何がわかる！」

琴「恨み持つ目は、わかるのです」

と、琴は襟巻を外して見せた。

白い肌に、赤黒い痣が残っている。

大村「！？……」

琴「己の恥ゆえ一度しか言いません。私は、祐天の手下の伍平たちに……手籠めにされました」  
大村、刀の柄から手を離す。

○ 堀端・夜

琴と大村が歩いている。

大村「俺の父は房総の博徒でな。出稼ぎに出た上州の賭場でしくじって、若い衆と喧嘩

になった。その時仲裁に入ったのが祐天だ。祐天はその日のあがりで手打ちにした。が、父は殺された。闇討ち同然にな

琴「祐天殿に？」

大村「ああそうさ。そうに決まってる。俺は浪士組に志願した。あいつを討つために。けれど、あいつの周りには、いつも子分たちがいる」

琴「私が助太刀いたします」

大村「断る。女に助けられたとあっては、母も妹も土地で生きていけなくなる」

琴「では諦めるのですか」

大村「そんなこと、俺の勝手だ」

琴「ならば、私は勝手に私のなすべきことをいたします。文句は言わせません」

大村「大村、立ち止まって、琴をじっと見る。大村「（考えて）庚申だ。庚申の夜、あいつらは千住の女郎屋で夜通し飲み明かす。明け方、江戸へ戻ってくる時が、われらのことをなすときだ」

○ 新徴組屋敷・道場・夜

庚申の夜。道場では宴会が始まっている。かつが忙しそうに働いている。良之助たちが無邪気に飲んでいる。

中川「（琴に）出世だ！ 飲め！」

琴、仕方なく飲む。と、大村が立ち上がり、密かに琴に目配せをする。琴、頷く。

○ 同・廊下・夜

そつと宴会を抜けてくる琴。

かつ「（背後から）どこか行くの？」

琴「（ビクツとして）あ、いや、少し酔ったみたいで……中川殿が飲ませ上手ゆえ」と、去っていく。

○ 道・夜

大村「急げ、木戸が開まる」

木戸に滑りこむ二人。  
木戸番が出てくる。

木戸番「名前を申せ」

大村「二人、顔を見合わせて、

大村「上総国、大村達尾」

木戸番「お前は」

琴「顔を知られまいと、

琴「庄内藩士：藤林鬼一郎」

木戸番「怪しげに琴を見て、琴の下げ

ている提灯を見る。丸に片喰の紋。

木戸番「庄内様か：通れ」

大村「かたじけない」

琴と大村、急ぎ足で歩いていく。

○ 千住宿・妓楼・夜

○ 同・座敷・夜

伍平、柴八、軍次が女たちに絡みながら派手に騒いでいる。祐天は苦笑いしながら杯を傾けている。

○ 同・表

琴と大村が妓楼を見上げている。

小さく三味線と乱痴気騒ぎの音。

大村「どうした？」

大村が見ると、琴の手が緊張で小刻みに震えている。

琴「：：少し風に当たってくる」

○ 荒川・夜

川を渡しに行く。

見渡す土手の上、ブルブル震える手を

押さえる琴。

○ 妓楼・座敷・夜

祐天が立ち上がる。

伍平「兄貴い？」

軍次「まだ早いじゃないすか。せっかく：：」

祐天「馬鹿野郎、俺たちやお役目があるんだ。いつまでもこんなことばかりしてられねえ」

祐天、出て行く。

○ 同・表・夜

何やら玄関先が慌ただしい。  
と、祐天たちが出てくるのが見える。  
焦る大村。琴がまだ戻っていない。  
悠然と歩いていく祐天。後から伍平たち  
ちが小走りに追いかけていく。  
大村、仕方なく追跡を開始する。

○ 夜道

歩く祐天と子分たち。  
時折後ろを気にして、後をつける大村。

○ 川端・夜

遠く江戸の灯が見えてくる。  
焦る大村。祐天は気分良く立ち小便を  
始める。子分は離れたところにいる。  
チャンスだ。

祐天「一瞬躊躇うが、飛び出していく大村。  
大村、刀を抜いて祐天に突きつける。」

大村「祐天仙之助、わけあって貴様を討つ」  
祐天「てめえ、誰だ？」  
大村「新徴組隊士、大村達尾。覚えてるか。」

祐天「俺の父は沼田で貴様に殺された桑原雷助だ」  
祐天「桑原？ ……そんな奴あ知らん！」  
大村「とぼけるな！」

祐天「と、かかる大村。祐天は下駄をぶつけて身を避ける。」

祐天「おいてめえら！ 早く！ こっちだ！」  
伍平たち、祐天の異変に気づいて駆け寄ってくる。大村、なんとか一太刀浴びせようとするが、あつという間に伍平たちに取り囲まれてしまう。

伍平「てめえ、兄貴に何しやがる」  
祐天「大方ショバの掟を破りでもしたんだろ  
う。俺を恨むのは筋違いってもんだぜ」

伍平「覚悟しやがれ」  
と、伍平たち大村に斬りかかると、何



者かに刀が弾かれた。

伍平「？」

と、息を切らして琴が躍り出てきた。

大村「中澤！」

琴「すまない」

祐天「（も、気づく）お前、お嬢か？」

琴「祐天殿、あなたに恨みはありません。た

だ、この者たちには、つけねばならぬけじ

めがございます」

祐天「なんだと？ お前ら、何をした！」

伍平「（琴に）てめえ！」

琴、大村に目配せをする。大村、祐天

に向かつて駆け出す。伍平たちが追う

のを琴が立ちふさがる。

軍次、斬りかかる。琴、受ける。剣の

切っ先が震えている。

軍次「は！ こいつ震えてやがる」

琴「あなたたちが怖いわけではない」

軍次「何？」

琴「人を斬るのが怖いのだ」

軍次、琴に斬りかかる。琴、気合を込

めた叫びと共に、軍次を一刀の下に斬

り伏せる。

琴「（落ち着きを取り戻していく）」

柴八「このアマ！」

柴八がかかる。琴、避ける。伍平が後

ろから襲いかかってくる。これも琴、

避ける。柴八がたまらず突進してくる。

琴、巧みに身をかわしてこれを斬る。

×

大村が祐天と組み合っている。抵抗す

る祐天。大村が鬼の形相である。

×

琴と伍平が向き合っている。伍平の額

に脂汗が滲んでいる。

琴、伍平に斬りかかる。伍平、なすす

べもなく、倒れる。

琴、そのまま、大村の元へ。

×

大村、祐天を仕留めた。乱闘の跡。大

村は肩でゼイゼイ息をしている。  
琴がやってくる。

琴「（黙禱をして）」

大村「……礼を言う」

琴「……大村殿、やはり私も」

大村「（笑って）言うな。つまらん喧嘩の後  
始末は俺一人で十分だ。その代わり、この  
ことは誰にも言うな。約束だ」

琴「……」

大村「いいな！」

琴「あいわかった」

大村「早う行け。世話になった」

琴、躊躇う。

大村「行け！」

琴、頭を下げると走り去っていく。

○ 新徴組屋敷・中庭・日替わり

大村の荷物が運び出されていく。それ  
を見ている琴と良之助。

良之助「何があったんだろうな」

琴「……」

○ 伝馬町・牢内

自害して事切れている大村。  
その満ち足りた顔。

○ 新徴組屋敷・道場

琴が入ってくる。

玉城が正座しており、顔をあげて琴を  
見る。琴、じっとその目を見返す。

玉城「（立ち上がり）始めるぞ」

琴「はい」

今日も稽古が始まろうとしている。

○ 闇

甲高い呼子の音。

遠く半鐘の音がなっている。

T 「慶應三年 師走」

○ 江戸・大通り・夜

全速力で逃げてくる浪人たち。  
やはり全力で追いかけるのは新徴組の  
隊士たちだ。中川を先頭に十数人。中  
に琴の姿がある。  
浪人ア「おやつとさあじやのう！」  
浪人イ「おお、江戸がよう燃えとる！」  
浪人たち、大笑いして逃げていく。  
中川「薩摩の奴ら！」

○ 十字路・夜

浪人たち、別れて逃げていく。  
新徴組の一同やってくる。  
隊士（相原倉吉）「あっちだ！」  
隊士（古屋常三郎）「どっちだ！」  
隊士（小倉宗次郎）「バラバラに逃げたぞ！」  
中川「別れて追え！」  
さつと三方に別れて追う隊士たち。  
向こうの空が赤い。半鐘の音。

○ 路地 1・夜

相原らが追いつき、浪人イを斬る。

○ 路地 2・夜

挟み込まれて抵抗する浪人ウ。古屋、  
小倉に串刺しにされる。

○ 路地 3・夜

中川と琴たち。浪人アを見失う。

中川「こっちは逃げ場がないはずだ」

琴「手分けして探しましょう」

中川「気をつけろよ」

○ 路地 4・夜

琴、来る。目をこらして闇を見る琴。  
一歩一歩慎重に間を詰める。  
が、そこは袋小路だった。  
何かが飛び出してくる！と、見ると  
それは黒猫だ。琴、ふと黒猫に気を取  
られた。  
と、いきなり背後から琴の頭が刀の鎧

で叩きつけられる。よろめく琴。  
が、すぐに刀を構える。浪人アが破れ  
かぶれでかかってくる。琴はかわすの  
で精一杯だ。  
ふらつきながら応戦する琴。が、利き  
腕を少し斬られて、刀を落とす。

浪士ア「覚悟せい！」

と、琴の頭上に刀を振り被る浪人ア。

と、浪人アがゆっくりと崩れ落ちる。

いつかと同じだ。

暗闇に男が立っている。顔は見えない。

男、立ち去ろうとして、

琴「待て！」

男、立ち止まる。琴は男の羽織に薩摩

丸に十字の紋を見つける。

琴「（刀を構えて）貴様も薩摩か」

男「さすが犬の目は節穴だな。こやつらは御

用盗を騙る偽薩摩だ。一緒にするな」

男、去りかけて、

琴「待て！」

と、男、振り返る。と、月明かりに照

らされて、男の顔が見える。高良だ。

琴「！」

高良も琴に気づく。

中川の声「中澤あ！（と向かってくる足音）」

高良は、無言で逃げ去っていく。

○ 新徴組屋敷・家老部屋

権十郎の前に、菅が難しい顔で黙り込

んでいる。琴と中川が呼ばれている。

菅「それは誠に薩摩のものなのだな」

琴「（菅に）相違ございません」

菅「御家老」

権十郎「その者は昨夜の付け火は薩摩の手で

はないと申したのだな」

琴「高良殿は嘘を申す方ではありません」

菅「（琴にイライラと）出すぎじゃ！」

権十郎「御用盗の騒ぎは薩摩が裏で糸を引い

ておる。ただ、大樹公は大政を朝廷に奉還

し、目下謹慎の身。迂闊に挑発には乗るな」

琴と中川、平伏する。

○ 江戸・往来

スリを見事な体術で組み伏せる琴。  
街の人々から拍手喝采。

少女「少女が駆け寄ってきて、  
と、一輪の花を差し出す。少女、琴の  
髪に花を挿す。照れる琴。」

○ 三田屯所・夜

中川の隊が休息をしている。体を拭く  
者、菓子を食う者、寝そべる者。

かつ「おつかれさまでした！」

中川「かつ！ お茶を配っている。」

中川「かつ！ お茶より酒を出せ！」

栄之進「お役目ご苦労様です」

栄之進が隊を労いながら誰かを探して  
いる。かつは栄之進が気になる。  
表に琴が立っているのが見える。栄之  
進が嬉しそうに表へ出ていく。

○ 同・表・夜

じつと向こうを見ている琴。

手には、少女の花。

視線の先には大きな屋敷の門が見える。

栄之進「薩摩藩邸は今日も静かでした」

琴「（見て）」

栄之進「疲れたでしょう、中で休んで下さい」

○ 同・内・夜

琴と栄之進が入ってくる。

かつ、表情が曇る。

栄之進「かつ様！ 琴殿にお茶を」

かつ、お茶を近くの机にドンと置くと、  
奥へ入っていく。

栄之進「？ どうしたのでしよう」

琴「： 失礼」

○ 同・勝手・内  
琴、入ってくる、かつが向こうを向

琴「かつ殿」

かつ「お茶ならあつちに置いたでしょ」

琴「かつと、側に行く」

かつ「構わないでよ！」  
かつ、勝手を出ていく。

○ 同・内・夜

かつ、飛び出していく。

琴「かつ殿！ 待ってください！」

と、琴が追いかける。

相原「なんだ！ 女同士でちくりあい」

隊士たち、笑う。

中川「（怒って）誰だ！ おかしなこと言っ

た奴は！ ただじやおかんぞ！」

隊士たち、ドツと笑う。

とその時、外から何発もの銃声が聞こ

えてくる。

中川たち、屯所を飛び出していく。

○ 同・表・夜

屯所に向かって浪人たちが銃を構えて

いる。リーダー格の大竹が叫ぶ。

大竹「撃て！」

一斉射撃。かつの悲鳴。

琴「かつ殿！」

琴、かつに覆いかぶさるようにならず

まる。弾丸が地を跳ね、壁を穿つ。

その一発がかつの肩に当たる。

かつ「痛いッ！」

中川たちが出てくる。

中川「まずい！ みんな隠れろ！」

大竹「撃て！」

隊士たちが身をかがめる。

さらに一斉射撃。

薩摩藩士1「庄内藩は腰抜けじゃ！」

薩摩藩士2「新徴組はこそ泥専門じゃあ！」

薩摩藩士3「薩摩には手も足もでん、うすの

ろのドン亀じゃあ！」  
相原「野郎！」

隊士たちが飛び出そうとする。  
薩摩藩士たち、銃を構える。

中川「いかん！　ダメだ！」

大竹「撃て！」

三たび一斉射撃。

大竹「撃ち方これまで！」

薩摩藩士1「引き上げじゃ！」

と、薩摩藩士たち、一気に逃げ出す。

中川「逃げたぞ！　追え！」

新徴組隊士たちが、一斉に駆け出す。  
と、薩摩藩邸の通用門が開いて、男が

出てきた。高良だ。

高良「早う戻ってこい！　捕まるな！」

琴、顔をあげて高良を見た。

逃げていく薩摩藩士。追う新徴組。

栄之進「（来て）琴殿！　お怪我は！」

琴「かつを！」

琴、かつを栄之進に預けると、飛び出していく。

琴、走る。男たちを追い越してグング

ンと薩摩藩士たちに追いついていく。

高良「何をモタモタしとるんじゃ！」

続々と薩摩藩邸に駆け込んでいく藩士

たち。琴が迫ってくる。

高良、それをキッと睨んで、

高良「いかん！　門閉めろ！」

最後の一人の大竹を押し込んで、高良

が飛び込む。間一髪。琴の目前で通用

門が閉まる。遅れて、中川たち新徴組

隊士がやってくる。

門の中から、聞えよがしの高い笑い声

が聞こえてくる。

悔しげな新徴組隊士たち。

琴、強い眼差しで門を見上げる。

無残に踏みにじられた少女の花。

○ 新徴組屋敷・かつの部屋

かつが床に臥せている。肩に包帯。

側で看病をしている琴。  
廊下を憤然と歩いていく中川、良之助。  
琴、気になる。  
かつ「（それを見て）行けばいいのよ。大した傷じゃないんだから」  
琴、黙って首を振る。

○ 同・道場

林、山田、玉城に向かって談判をして  
いる中川、良之助ら隊士たち。  
中川「娘に向かって飛び道具とは、薩摩は卑怯じゃ！」  
山田「静まれ！ 静まれ！」  
中川「かつが撃たれたんですぞ！」  
隊士たち、同調する中、良之助だけが  
一歩引いて落ち着いている。  
玉城「落ち着けと申すに！」  
相原「これが落ち着いてられますか！」  
林「それが薩摩の手だと申しておる！ そんなことも分からんのか！」  
古屋「弱腰じゃ！」  
隊士たち、「そうだ！」 「薩摩討つべし！」と興奮してまくしたてる。

○ 同・かつの部屋

かつ、眠っている。  
そこへ玉城が入ってくる。  
琴「（気づいて）御指南役殿」  
玉城「（かつを見て）具合は」  
琴「傷は：：ただ、痕が少し」  
玉城「男たちが怒っておる。無理もない」  
琴「私とて、腹が立たないわけではありませんが、今は先に動いた方が不利と存じます」  
玉城「男どもはみな、頭に血が昇っておってのう。いつまで抑えがきくものか」

○ 神田屯所・玄関先・夜

良之助たちが役目を終えて休んでいるが、ピリピリとした空気が漂う。  
ガタッと物音がして、良之助が咄嗟に



良之助「表に出るが、痩せた野良犬がいるだけ。」

○ 同・勝手・夜

風呂を沸かしている下男の儀助（48）。大勢の足音が近づいてくるのが聞こえる。と、足音が止まる。

儀助「？」

儀助、不審に思い、勝手口を出ていく。

○ 同・玄関先・夜

銃声が聞こえる。ハッとする良之助。

良之助「裏だ！」

慌てて裏へ飛び出す一同。

○ 同・勝手・夜

良之助たちが来る。一斉射撃で蜂の巢の勝手口に儀助が倒れている。

良之助「今日こそは逃がすな！」

勝手口から飛び出していく隊士たち。

良之助、儀助を抱き上げる。  
死んでいる儀助。

○ 新徴組屋敷・道場

隊士たちが怒って詰め寄せている。

古屋「庄内藩は何をしているんだ！」

小倉「薩摩になめられて悔しくないのか！」

中川「取締役殿はどこじゃ！」

林、山田、玉城らが懸命になだめる。

菅「静かにせんか！」

菅の迫力に気を呑まれる隊士たち。

菅「御家老は御城内におられる。戻られればなんらかの沙汰がござろう」

○ 長屋

儀助の家。細やかな葬式。泣いている儀助の妻。幼い子供が無邪気に遊んでいる。手をあわせる琴と良之助。

良之助「なんでお前が死なねばならんだ」  
琴「……」

○ 新徴組屋敷・大広間

殺気立つ隊士たちが詰め寄せている。  
琴、良之助、林、山田、玉城たちは後方に控えている。  
権十郎と菅が正面にいる。  
権十郎「本日、御老中稲葉正邦様より正式に薩摩討伐の命を承った」  
隊士たち歓声をあげる中、琴たちは複雑な表情である。

菅「静粛に！」

権十郎「本意とは言えぬが、昨今の江戸市中の混乱をみて、お受けすることとした」  
興奮する隊士。緊張した面持ちの琴。  
権十郎「ただし、我が藩のみでは私怨の謗りを免れ難いゆえ、他藩との共同を申し出たところ、お聞き届けくださった。上山、鯖江、岩槻、出羽松山の諸藩とともに明日未明、三田の薩摩藩上屋敷に討入りを決行する。今一度申す。これは私怨私闘にあらず。幕府と薩摩との戦さである！」  
隊士たち「うおー」と声をあげる。

○ 同・中庭

戦さ支度で走り回る隊士たち。  
林、山田、玉城ら新徴組首脳と中川、良之助ら小隊長たちで軍議が行われている。そばに琴が控えている。  
琴、巢箱を見る。手入れもなく、荒れたままの巢箱。小鳥の姿はない。  
声「御大将、お着き！」  
と、討入りの総大将、庄内藩士石原倉右衛門（40）と参謀格安倍源蔵（46）がやってくる。

石原「総大将の石原にござる」

安倍「参謀の安倍でござる」

林「ご両所、まず（と床几をうながす）」

石原「（立ったまま）このまま」

安倍、地図を広げる。  
安倍「新徴組には、出羽松山藩とともにこちらの西門を守っていたたく」  
山田「承知つかまつた」  
安倍「ただし、囲みはわざと緩めていただく」  
石原「烏合の衆でも窮鼠となれば死に物狂いでかかってくる。無用な消耗は避けたい」  
安倍「庄内藩本体は正面より突入します。おそらく浪人どもは囲みのゆるい西門より脱出してくる」  
中川「（不満げ）我らは突入しないのですか」  
石原「逃げた浪人どもは高輪で捕縛する。それがそなたたちの役目だ」

○ 赤羽橋・屯所・夜

戦さの格好のまま食事を取っている新徴組隊士たち。男たちは不満である。  
小倉「これだけ馬鹿にされながら、指をくわえて見ているとき」  
相原「我慢ならねえ！ 薩摩の野郎を片っ端から叩き斬ってやりたいよ！」  
良之助「隅っこで食事をする琴と良之助。」  
琴「兄上は平気ですか」  
良之助「（琴を見て）お前も不服か？」  
良之助「俺は：：なんとも思わん」  
琴「食事が進まず、茶碗を置く。」  
と、そばでもりもり食事を取っている男、大熊敬助（28）がそれを見る。  
大熊「食わんのか？」  
琴「え？」  
大熊「食わんのなら、もらってもいいか」  
と、茶碗を取ろうとして、  
琴「食べます！」  
と、琴、無理やりにご飯をかきこむ。

○ 道・夜

整然と進む新徴組隊士たち。  
琴の後ろで大熊が「寒いいう、寒いいう」と言いながら歩いてる。

○ 薩摩藩邸・正門・早朝  
庄内藩兵たちが取り囲んでいる。馬上の石原。兵士たちの中に栄之進がいる。

○ 同・西門・早朝  
門から離れたところで待機する新徴組。中川「いいか！ 抜け駆けは禁止だ！」  
緊張した面持ちで藩邸を見やる琴。

○ 同・正門・早朝  
馬上の石原が安倍に合図を送る。  
安倍「開門！ 開門！ 開門！」

ややあつて、通用口が開く。中から、薩摩藩留守居役の篠崎彦十郎（47）がでてくる。兵士たちの射るような視線が篠崎に送られる。  
安倍「庄内藩参謀安倍源蔵にござる。貴藩藩邸に匿われている不逞浪人を引き取りに参った。もし差し出されなくば、不本意ながら貴藩藩邸を焼討ちいたす所存である」  
篠崎「……まず」  
と、安倍を招き入れる篠崎。

○ 同・西門・朝  
息を潜めている新徴組隊士。  
薩摩藩邸も不気味なほど、静かだ。  
と、大熊が琴のそばにやってくる。

大熊「（小声）中澤、お前は どうする？」  
琴「どう、って？」  
大熊「このままここにおつても手柄は立てられん。俺は足が遅い。走っては追いつかん」  
琴「で、どうする」  
大熊「知れたこと（と藩邸を顎で指す）」  
琴「お主……（と名前を言おうとして）」  
大熊「大熊じゃ。大熊敬助。お前と同じ六番組だぞ。名前くらい覚えとけ」

○ 同・玄関先・朝  
安倍と篠崎が談判をしている。

安倍「もうこれ以上は待てん！ 決断を」  
篠崎「とは申せ、先ほどより申し上げている通り、某が一人の所存ではどうも」  
安倍「言い訳を聞きに来たのではない！」  
篠崎「ただいま下屋敷に使いを走らせましたゆえ、今しばらくのご猶予を」  
安倍「結構！」  
と、安倍が立ち上がる。  
安倍「分かり申した。引き渡されはせんのでしよう」  
篠崎「（キツとなり）安倍殿」  
安倍「御免」  
と、安倍が引き返していく。  
篠崎「暫く！ 暫く！」

○ 同・正門・朝

グングン進んで行く安倍と、それを必死に引き留めようとする篠崎。  
篠崎「無用な血を流すことはあるまい」  
安倍「挑発してきたのはそっちじゃ！ ならば引き渡すか」  
篠崎「某では決められんのだ！」  
安倍「それでは話にならん！」  
と、安倍、通用口から出る。  
男たちの視線が一斉に安倍に注がれる。  
安倍「（石原に）もはや手切れにござる！」  
と、篠崎が安倍を追って出てくる。  
篠崎「暫く！」  
と、血気にはやった兵士が駆け寄り、篠崎に槍を突き立てる。篠崎、よろめきながら、門内に入っていく、バタリと倒れる。  
一瞬の静寂。のち、男たちの歓声。  
石原「かかれえ！」  
隊士、大砲に火をかける。

○ 同・正門

ドンと大砲の音。正門のほうから煙が上がつていく。ジリジリ焦る隊士たち。大熊が琴のそばにくる。

大熊「始まったぞ。どうする？」  
琴、迷う。

○ 同・藩邸内  
大砲と火煙の中、庄内藩士と薩摩藩士  
が切り結んでいる。奮戦する栄之進。

○ 同・西門  
煙に燻り出されるように、浪人たちが  
飛び出してくる。

中川「出てきたぞ！ 追え！ 逃すな！」  
と、小倉ら隊士たちが走り出していく。

大熊「（琴に）行くぞ」  
琴「どつちに」  
大熊「風向きじゃ！」

飛び出した琴と大熊はすぐに方向を変  
えて、西門のほうへ走り出す。  
良之助「（気づく）待て！ 琴！ 大熊！」

○ 同・邸内  
大砲の煙がもうもうと立ち込める邸内。  
怒号が飛び交う中、薩摩藩士達が右往  
左往している。琴と大熊が駆け込んで  
きて、藩士達と乱戦となる。  
大熊「はぐれるな！ 俺の近くにいろとな、  
不思議と弾が当たらんのだ」  
と、鉄砲隊を率いて大竹が来る。

琴「！」  
大熊「大丈夫！ 当たりやせん！」  
大竹「撃て！」  
鉄砲隊、発砲！ 煙の中で弾は外れる。

大熊「（得意げに）言うた通りじゃろ！」  
と、琴が駆け寄って、大竹に迫る。  
大竹「！ お前、女か！」

大竹、琴に斬り伏せられる。  
鉄砲隊が散り散りに逃げていく。

大熊「（来て）無茶をするのう！」  
高良の声「逃げろ！ 品川に薩摩の船がある。  
それまで何としてもたどり着け！」  
琴、見ると、高良が薩摩藩士たちを逃



琴 「兄上、兄上！」

良之助 「くる。倒れている琴を抱き上げると、思い切り頬を殴る。」

良之助 「このバカモンが！」  
川も怪我をした大熊を抱えている。と、中

○ 品川

高良たち薩摩藩士が逃げていく。追う新徴組、次々と薩摩藩士を斬り、捕縛していく。

高良 「走れ！ 振り返るな！ 船に乗れ！」

○ 薩摩藩邸・正門

石原が馬上より兵士たちに叫ぶ。

石原 「かちどきい！」

「えいえいおう！」と兵士たちが叫ぶ。すす煙にまみれた兵士たちの顔。榮之進もその一人。

○ 同・西門

琴を背負って出てくる良之助、中川と大熊がよろよろと続く。正門の方から聞こえてくるかちどきの声。

○ 江戸・俯瞰

燃える薩摩藩邸。  
江戸湾に逃げていく船。翩翩と翻る丸に十字の薩摩の旗。

○ 海

江戸の海と違い、荒削りな波が立っている。日本海だ。

T 「慶應四年 庄内」

新緑の季節。ポカポカとした陽気の中、海を見渡す丘の上に良之助が座り、ぼんやりと海を眺めている。

○ 湯田川温泉郷・畑

中川と大熊が、八兵衛（63）を手伝っ



八兵衛「少し一休みしている。て野良仕事をしている。」

と、山田がやってくる。

山田「中川！ すっかりお百姓だな」

中川「俺はこっちの方が向いとるかもしれん」

大熊「山田様！」

山田「お前はしっかり働け！ 八兵衛どの！

こやつらが世話になっとなりますよ！」

八兵衛「何の、助かっとなりますよお！」

○ 鎮守

境内にずらりと揃う新徴組隊士たち。

玉城が剣術の稽古をしている。

懸命に木刀を振り、汗を流す琴。かか

とに癒えた刀傷。

○ 八兵衛宅・勝手

夕餉の支度をするかっくと八兵衛女房の

っん「（湯が）沸いとるよ」

かっ、甲斐甲斐しく働く。

と、馬が駆けてくる音が聞こえる。

っん「誰か来たんだべか」

かっ、見ると、それは栄之進。頭に包

帯を巻いている。

かっ、飛び出していく。

○ 同・表

馬より降りる栄之進。

かっ「栄之進様！」

栄之進「（見て）かっ様！」

かっ、駆けて来たので、息を切らす。

かっ「その傷（頭の包帯）」

栄之進「せんでもいい戦さで怪我をしました」

○ 道・夕

稽古より戻ってくる琴。

大熊「中澤！」

大熊と中川、八兵衛が歩いてくる。

琴「お戻りですか」

中川「なんだ、良之助は一緒じゃないのか」

○ 八兵衛宅・玄関・夕  
琴「ただいま戻りました」。

中川「誰かいるのか？」  
と、何やら奥から賑やかな笑い声。

琴「兄上！ 一体どこに」

良之助「怒るな。海を見とったんじゃ。それよりも……」

○ 同・座敷・夕  
走ってくる琴。

琴「栄之進殿！」  
栄之進とかが座っている。栄之進、

琴「栄之進殿！ このざまです」

栄之進「かつ、寂しそうに笑っている。

中川「おお！ 栄之進！ なんだその頭は」

栄之進「わざわざ外して撃ってくれている所に当たりに行ってしまった」  
と、つんが来て、

つん「嬉しいのは分かるが、まず風呂さ入れ」  
○ 同・座敷・夜  
炉を囲んで談笑する一同。

かつは控えめに茶を入れたり、片付けをしたりしている。

大熊「まさか天童藩が薩長につくとはなあ」  
中川「それもこれも、あっけなく城を明け渡しちまうからだ。幕府は腰抜けだ」

良之助「言うな、中川」  
栄之進「天童藩も本意ではないのです。ずっと隣国同士仲良くやってきたんです」

良之助「これからどうなるんだ、俺たちは」  
栄之進「先ごろ、我が庄内と会津の処分を巡る会議が白河で行われましたが、奥羽諸藩と薩長の会議は決裂しました」

中川「いよいよ朝敵、か」  
榮之進「その上仙台藩の一部が暴走し、新政  
府軍の参謀を闇討ちにしてしまった」  
重苦しい空気。  
榮之進「長州の世羅修造という男です。評判  
の悪い男でしたが、理由はどうあれ、敵方  
の参謀を殺したのです。もう引き返せない  
所まで来てしまっているのかもしれない」

○ 同・裏庭・夜

琴「琴を呼び出した榮之進。」  
榮之進「みんな元氣そうですね」  
琴「へわざと榮之進から離れて」庄内はとて  
も良いところゆえ、皆、のびのびとしてお  
ります。兄上なんか稽古にも出さず……」  
榮之進「……考えてくださいましたか」  
琴「へ身構えて……いえ」  
榮之進「馴れ合いの戦さでもこうして血が流  
れるのです。本気の戦なら、もっと……」  
琴「それはもとより承知の上でここまで来た  
のです。私には、まだ……」  
榮之進「私は長峯の家に入って欲しいなどと  
申し立てているのではありません。私は……」  
琴「榮之進殿、かつをどう思われますか」  
榮之進「へはぐらかされた」かつ様ですか」  
琴「かつは毎日、鎮守にお百度を踏みに行っ  
ていました。貴方の無事を祈って」

○ 鎮守・回想

冷たい雨が降る。かつがお百度を踏ん  
でいる。  
傘を届けに来た琴。声がかげられない。

○ 元の八兵衛宅裏庭・夜

榮之進「確にかつ様はいい娘さんです。で  
も、私には妹みたいなもので。私が本当に  
好きなのは……」  
と、二人の様子を見に来ていたかつが  
「たまらず飛び出していく。」  
琴「！ かつ！」

と、追いかけてよとすが、諦める。

榮之進「：：：申し訳ないことをしました」

琴「榮之進殿のせいではない」

榮之進「間もなく鶴岡から新徴組に召集がかります。薩長との戦さに備えた本格的な訓練です。奉行の酒井玄蕃殿はお厳しい方だ。男も女もない。私は琴殿に：：：」

琴「榮之進殿、左様な気遣いは無用です。私は女であることを捨てたのですから」

○ 鶴岡城下  
美しい城。大きな城下町。活気がある。

○ 鶴岡城・石段  
琴たちが大きな俵を背負わされて石段を駆け上る。厳しい顔でその様子を見ている奉行の酒井玄蕃（29）。

玄蕃「薩長との戦さは天童のとはわけが違どうぞ！ 死にたくなければ早く登れ！」

中川も良之助も苦しそうにしている。

大熊はへばっている。

玄蕃「休むな！」

琴は必死に男たちについていく。

○ 同・溜まり場  
隊士たち、死んだようにへばっている。ぐったりとして声も出ない。

玄蕃「こんなんでへたばって戦さができるか！ これから射撃の訓練だ」

○ 同・弓道場  
隊士たちに一丁ずつ銃が配られる。

玄蕃「最新式の銃を支給する。スナイドルと

いう。これまでの先込めと違い、（開けて）

ここを開けて、弾を込める」

玄蕃「弾込めの時間が格段に短くなった。こ

れで薩長を討つ！」

射撃訓練をしている隊士たち。 ×  
良之助、器用に銃を扱う。 ×  
良之助、撃つ。的を撃ち抜く。

玄蕃「なかなかいいぞ」  
大熊、全然銃を扱えない。

大熊「中澤も銃は苦手か」  
琴「銃は嫌いだ」

と、琴、やはり器用に銃を使い、的を  
撃ち抜く。感心する大熊。

と、山田がやってくる。  
山田「琴、御家老がお呼びだ」

○ 同・家老部屋

権十郎と菅がいる。二人の前に琴。  
菅「本日呼び出したのは他でもない。そなた

に一つ頼みたいことがある」  
琴「（緊張して）はい」

菅「実は、秋田に奥羽鎮撫総督が入った。仙  
台にいたのだが、へまをしておつて逃がして

しもうた。慌てて使節を派遣して呼び戻そ  
うとしておるのだが……」

権十郎「仙台に任しておくのは不安でう」  
菅「我らも秋田の去就を知りたい。お主には

密偵で久保田城下に入ってもらいたい」  
権十郎「娘の姿でだ」

琴「娘、ですか」  
権十郎「殺気立った男どもでは密偵は務まら

ん。そなたにはいざという時、剣の腕があ  
る。久保田の裏には薩摩がおる。容易い任

務ではない。やれるか」  
琴「目を輝かせる」

琴「承知しました」

○ 八兵衛宅・夜

良之助が反対している。中川、かつ、  
大熊も複雑な表情である。

良之助「危険だ！ 危険すぎる」  
琴「兄上、お聞き分けください。もう、決め

たことです」

良之助「しかしな、琴、なにもお前が……」

中川「良之助、よせ」

琴「兄上、すみません」

良之助「勝手にしろ！（とでていく）」

中川「琴、分かってやってくれ……」

琴「はい（かつに）かつ、頼みがあります」

○ 同・かつの部屋・夜

かつが琴の髪を結っている。

鏡の中で、琴の顔が娘に変わっていく。

かつ「琴ちゃん、やっぱこっちの方がキレイ」

琴「そうですか？（と鏡を見て）なんか、

女みたいですね」

かつ「（笑って）」

琴「？（なんで笑うのか気づかず）」

かつ「ねえ、琴ちゃん」

琴「え？」

かつ「栄之進様のことはもういいの。だから、

必ず、生きて帰ってきて」

琴「……無論です」

○ 同・表・早朝

可憐な娘姿の琴が旅立っていく。

良之助たちが見送っている。

○ 秋田久保田城下

穏やかな街並みに、男たちの一団がの

し歩いていく。娘姿の琴がその様子を

観察している。

○ 城が見える茶屋

琴、団子を食べながら、城の様子を窺

う。何やら沢山の荷物が運び込まれる。

茶屋の婆「娘さん、一人かい？」

琴「あ、（と、声の調子をあげて）いえ、宿

に連れのもの」

○ 宿・玄関先

草鞋を脱いでいる琴。

と、青年が近寄ってくる。山内富治  
(19)である。

山内「中澤琴殿ですか」

琴「(警戒して)」

山内、懐から印籠を出す。竹に雀の伊  
達家の家紋。

山内「山内富治と申します」

○ 道

琴と山内が歩いている。仲の良い姉弟  
に見える。

山内「もう久保田の街はご覧に？」

琴「(いつもの声の調子で)ええ、少し」

山内「我らが来ているのに戦さ支度を隠そう  
ともしない。久保田はもういけません」

琴「：：」

山内「でも、この街は好きだ。人は親切、食  
べ物もうまい。どこか、仙台に似ています」

琴「山内殿はずっと仙台に」

山内「はい、お城勤めの小姓です。初めて領  
外に出ました。こんな役目でなく、もつと  
のどかな久保田に来てみたかった」

琴「私も同じ気持ちです」

山内「しかし、凄腕の女剣士が来るとい  
うので、どんな巴御前が来るのかと思ってい  
ましたが、キレイな方で良かった」

琴「そんな：：(少し照れる)山内どの：：」

○ 幸田宅(仙台使節宿舎)

久保田近郊の豪農の家が仙台使節の宿  
舎。鬱蒼とした竹林に囲まれている。

○ 同・控えの間

待っている琴。

鏡が置いてあり、琴の姿が映っている。  
琴、鏡に映った姿を眺めて、かわいい  
表情を作ったりする。

山内「(入ってきて)：：こちらです」

琴、慌てて元の澄まし顔に戻る。

○ 同・座敷

山内「案内されて入ってくる琴。中には、志茂又左衛門（48）以下、仙台中には、志茂又左衛門（48）以下、仙台藩使節十名が揃っている。」

志茂「ささ、こちらへ」

琴「招かれて座に着く。」

× × ×

山内「茶を持って入ってくる。琴に志

茂「御見聞された通り、久保田はすでに薩

摩の掌中。参謀大山格之助が、久保田造反

の絵図面を書いておる。山内、あれを」

志茂「白河列藩会議の時の名簿です」

琴「開いてみる。」

志茂「この者たち全てが、久保田におる」

琴「高良大志郎」の名前を見つける。

志茂「この調子では戦さ支度も間もなく整う

はず。ご準備、ゆめゆめ怠りなきよう」

琴「（胸が騒ぐ）」

志茂「？ いかげなされた」

琴「いえ：：忝のう存じます」

○ 道・夜

琴「一人でも帰ってきました。」

山内「いえ、お役目ですの」

無言で歩く。

と、前に数人の男たちが固まって歩いて

いるのが見える。その先頭に立って

いるのは、高良だ。

琴「山内殿、本当にここで結構です。貴方は

宿舎にお戻りください」

山内「どうかしましたか」

琴「昔の知り合いを見かけました」

山内「（何かを察し）承知しました。お気を

つけて」

○ 広小路・夜



往来に身を潜めながら、高良たちを追跡する琴。高良たちは肩で風を切るように往来をのし歩く。

○ 久保田城・門・夜

高良たちが我が城のごとく入っていく。琴、それをじっと見ている。

○ 鶴岡城・家老部屋

権十郎「菅、戦さ支度を急がせい」  
菅「（沈痛な面持ち）」

○ 久保田城下・城の見える茶屋

茶屋の婆「あんたも毎日よく飽きずに」  
琴「（女の声）お団子が気に入りましたゆえ」

○ 宿・琴の部屋

琴「山内殿、何か、急ぎの御用でも？」  
山内「本日、談判が決裂いたしました」

山内「やはり、久保田は」  
山内「想像以上に強硬でした。よほど薩摩が恐ろしいと見えます」

琴「志茂殿は？」  
山内「これ以上久保田に留まっても意味はありません。恐らく明朝、仙台に戻ることに

山内「さようでしたか」

山内「貴方にはまたどこかでお会いしたい。その時は、是非一試合、お願い申します」  
琴「……喜んで」

○ 同・琴の部屋・夜

出立の準備が整っている。  
窓から外の様子を見ている琴。  
と、明らかに怪しい浪人風の男たちがある居酒屋に入っていくのが見える。

○ 居酒屋・夜

琴、入ってくる。

親父「いらっしやーい」

琴、店内を見回すと、奥の座敷に男たちが集まっているのが見える。

琴、座敷が見渡せる場所に座る。

親父「何にします」

琴「（気づかず低い声で）酒を」

親父「（驚いた顔で）へい」

琴、中の様子を窺う。様子はよく見えないが、話し声が漏れ聞こえてくる。

声「で、どうなった？」

声「高良殿の申す通り、今戻せば要らぬことまで敵方に知れることになりもす。大山殿もいよいよ腹を決められた」

高良、という言葉に反応する琴。

高良の声「では、やるのか」

声「長州は世羅の仇と意気込んでおるが、全て久保田に任せることに決まりました」

高良の声「久保田に踏み絵を踏ませるか」

声「我らを取るか、奥羽につくか。我らを取るなら、仙台の使節を斬れ、と」

と、親父が酒を持ってくる。

高良の声「連中は一刻も早く帰りたいだろう。とすると、やるなら、今宵……」

琴、上の空で銚子を受け取ると、熱くて落としてしまう。

親父「あーあ！」

琴「！ 申し訳ござらん！」

親父「気をつけておくれよ」

座敷の男たちが動く気配。

琴「すまん、これで勘弁してくれ」

琴、慌ててお金を置くと店から飛び出していく。座敷から姿を表した高良がその娘の後ろ姿を見やる。

○ 道・夜

ひた走る琴。裾が邪魔をするので、か  
らげて走る。

○ 河野宅・夜

琴がやってくる。と、家には仄かに明かりが灯っているのが見える。琴、少しホッとすると、息をつきながら歩き出す。と、暗がりから刃が飛び出してくる。琴、身をかわす。見れば、覆面をした刺客である。琴は無腰。刺客の刃を懸命に避ける。琴、砂を掴むと目潰しに刺客に叩きつける。怯む刺客。刺客は一人ではなかった。刺客たちは、潮が引くように逃げていく。琴、追いかけようとすが、家の中が気になり走って引き返す。

○ 同・内・夜

琴が警戒しながら進む。静かである。明かりのついた座敷の前に人が倒れている。琴、駆け寄って抱き上げる。首がない。しっかりし：：！

○ 同・座敷・夜

飛び込んでくる琴。部屋中に飛び散っている血しぶき。燭台の火に揺れる使節の死体。と、琴は見覚えのある着物を見つけて、駆け寄ると、刀の柄を握りしめて死んでいる。山の首がない。竹に雀の印籠が落ちている。拾い上げる。琴、怒りが込み上げてくる。と、物音。琴はすかさず燭台の火を消した。落ちていた刀を拾い、身構える。座敷に誰かが入ってくる。琴、逃げようと障子を開ける。

声 「中澤琴だな」

外から月明かりが差し込んでくる。男は高良だ。

琴「……貴方でしたか」

対峙する二人。

高良「田舎に帰れといったはずだ」

琴「これがあなたの言う正義なのですか」

高良「甘ったれたことをいうな。俺たちは戦

争をしているんだ」

琴、刀を構える。

琴「あなたを斬ります」

高良「やめておけ」

と、高良は懐から短筒を取り出して琴

に向ける。

高良「刀の時代は終わったのだ」

琴「問答無用！」

と、琴、斬りかかると、高良は天井に

向けて短筒を発砲する。

琴、反射的に身構える。

声「どうした！ まだ生き残りがいたのか！」

浪人たちが駆けつけてくる足音。

高良「次は外さん」

琴「（悔しい）」

高良「ここで犬死する気か！」

琴、座敷から飛び出していく。高良、

再び天井に向けて短筒を二発、三発。

### ○ 藪の中・夜

逃げる琴。後から追いかけてくる浪人

たち。琴、岩陰に身を潜める。口を手

で抑えて息を殺す。

声「逃すな！」

男たちが走り去っていく。

### ○ 久保田城下・早朝

仙台使節十一名の首が晒されている。

野次馬たちの群れから離れて、男の姿

に戻った琴がじっと瞑目している。

やがて、踵を返すと早足で久保田を去

っていく。

### ○ 鶴岡城下

慌ただしく輜重車や軍馬が行き交う。

早馬が往来を駆け抜ける。  
「陣触れじゃあ！陣触れじゃあ！」  
と誰かが叫んでいる。  
不安そうな人々の顔。

○ 鶴岡城・大広間

庄内藩主酒井忠篤（50）以下、庄内藩  
重役がずらりと並んでいる。  
庄内藩士と新徴組の組頭が整列して控  
える。

菅「（進み出て）ただいまより陣触れを行

う！一番大隊、大隊長松平甚三郎！参

謀長坂右近之介！：：」

緊張した表情で返事をする男たち。

菅「四番大隊、大隊長水野藤弥！及び新徴  
組隊長林茂助！」

○ 同・座敷

大隊長水野藤弥（38）以下、林、山田、  
玉城、良之助、中川らが作戦をたてて  
いる。

山田「先行部隊は新庄より攻めのぼり、大曲、

大館の陸路を塞ぎつつ、東より久保田を攻

める。第三軍、そして我々は、海沿いを、

本庄を抜けて南より進む」

水野「矢島藩が気がかりだ。矢島に背後を突

かれると厄介。途中矢島を攻略し、戦さの

足がかりとする。以上だ」

玉城「玉城が、良之助に尋ねる。

良之助「琴は、戻ってきたのか？」

○ 同・大手門

酒井玄蕃率いる第二軍が颯爽と出陣し  
ていく。その中に、栄之進がいる。  
かつが心配そうに見送りにきている。  
栄之進、見ると、土埃に汚れたままの  
琴が立っている。栄之進、隊列を離れ  
て琴の元へ。かつも琴に気づく。

琴「行かれるのですね」

栄之進「……はい。琴殿」

琴「戦さが終わったら、私と勝負をしましよ  
う。一本勝負です。栄之進殿が私に勝った  
ら、私は嫁に参ります」

栄之進「へ悲しげに笑って」そうですか……  
よく分かりました。私が琴殿に勝てるわけ  
がない」

琴「あなたにはもっと似合いの人がいます」  
栄之進「かつを見て、

栄之進「でも、今更……」

琴「へ栄之進の背中をドンと押してやる」  
栄之進「かつの元へやってくる。」

栄之進「怒ったような表情。」

栄之進「怒ったまま。」

栄之進「必ず、生きて戻ってまいります」

声「列を乱すな！」  
栄之進「慌てて隊列に戻る。」

かつ「涙を堪えている。そんなかつの  
肩を優しく抱き寄せる琴。」

○ 同・広場

新徴組一同が整列している。

琴も男たちと同じ装備で並んでいる。

隊長の林が馬上より、

林「新徴組、これより出陣いたす！」  
「おう！」と叫ぶ隊士たち。

○ 新庄

T「第二軍 新庄攻撃」

酒井玄蕃率いる第二軍の奮戦。

玄蕃「撃て！」  
栄之進が果敢に切り込んでいく。

一斉射撃にさらされ、潰走していく新  
庄藩の兵士たち。

○ 酒田

港町。新徴組隊士たちが船から荷下ろ  
しをしている。それを監督する中川。

中川「大事な兵糧と弾薬だ。粗末に扱うな！」

○ 同・本陣宿舎

林「第一軍、第二軍のもとに報告が届いている。」

山田「こっちも、負けていられませんな」

○ 矢島

T「第三軍 矢島攻撃」

第三軍が苦戦を強いられている。

高台から強力な大砲が打ち込まれる。

乱れる戦列。

大将の酒井兵部（41）が叫ぶ。

兵部「退却！ 退却！」

逃げ落ちる兵士たち。

○ 酒田・兵営

藩主忠篤の閲兵を受ける新徴組隊士たち。忠篤に随行して権十郎と菅が伴についてきている。

○ 本陣宿舎

権十郎、菅を迎えて、林、山田、玉城ら新徴組首脳陣が軍議を行っている。

林「石原様率いる第三軍は予想以上の抵抗に遭い、矢島攻略に苦戦しております」

山田「すでに新政府軍の武器が運び込まれておる様子でございます」

林「水野様の先遣隊が出立しましたが、戦況を変えられるかどうか」

山田「火力の差は歴然。まともにはぶつかっても被害が増すばかりでございます」

菅「長岡の河井継之助殿も苦戦しているという。我らは一刻も早く矢島を落とし、久保田に迫らねばならん」

と、玉城が進み出る。

玉城「畏れながら、一つ策がございます」

菅「策？ 申してみよ」

玉城「玉城、林の顔を見る。林、頷く。」

玉城「鳥海山を越えるのです」

権十郎「鳥海山？」

菅「無茶な」

玉城「鳥海山を越えれば矢島のすぐ背後に出ます。まさか敵もここから攻めてくるとは思いませんまい」

菅「しかし、鳥海山は険峻なる霊峰だぞ。そう容易く登って降りられるものではない」

玉城「であるが故の奇襲です。源九郎判官義経公の鶴越えに倣うのです」

権十郎「六甲と鳥海山では厳しさが違うぞ」

林「我らならやり遂げます」

権十郎「：：やってくるか」

林「無論です」

○ 新徴組宿舎

矢島作戦の陣容を見てシヨックを隠しきれない琴。いたたまれない良之助、中川、大熊。

琴「私の名前がない」

良之助「琴、聞け」

琴「私の名前がありません」

良之助「鳥海山は険しい山だ。そこを兵糧や弾薬や銃を担いで登らなくてはいけない。男でも辛い戦さだ」

琴「私もやれます。山登りなら、大熊よりもうまく登れます」

大熊「身も蓋もないことを言うな、中澤」

琴「これまでだって皆と同じ訓練を受けてきました。私が根をあげて、弱音を履いたことが一度でもありましたか？ 中川殿！」

中川「お前の気持ちは分かるが」

琴「誰が決めたのです！ 山田殿ですか！

林殿ですか！ 菅殿ですか！ 御家老様ですか！」

良之助「琴！ いい加減にしろ。みんなの優しさが分からんのか」

琴「それは優しさではなく、憐れみというのです（琴、立ち上がる）」

良之助「琴！」  
琴「憐れみを請うくらいなら、私は死にます」



琴、憤然と出ていく。

○ 本陣宿菅

権十郎と菅の元に申し継ぎの侍がやってくる。

侍「新徴組の中澤琴と申す者が直々に言上したき儀がござると、玄関先に参っておりますが、いかが取り計らいますでしょうか」

菅「（察して）会えぬと申せ」

侍「畏れながら……」

菅「いかがでした」

侍「相当な御覚悟とお見受けいたします」

権十郎「……構わぬ、通せ」

× × ×

琴、真つ白な死装束を身にまとい、権十郎の前に平伏している。

琴「このたびは、急なお目通りお聞き入れいただき誠に恐れ至極に存じます」

権十郎「挨拶は要らぬ。用を申せ」

琴「お願いの儀、（ためらうが）こちらに認めて参りました。どうか」

琴、書状を置く。下手くそな字で「お願いの儀」と書いてある。

菅、受け取らず、権十郎を見る。

琴「何故お許しただけぬのですか」

菅、言い淀む。

菅「何の話かな」

琴「矢島の儀にございます」

菅「（困って）……御家老」

権十郎「困ったのう。あまりその儀についてとやかかくいわれたくなかった」

琴「お聞かせください」

権十郎「まあ、そう言われてここで腹を切られても迷惑。不快な思いをいたすぞ」

琴「……構いません」

権十郎「ならば言うて聞かす。それはな、あなたが女だからだ」

琴「私は女を捨てました」

権十郎「いや、身体は捨てられん。証拠に、ほれ、そこに乳がある」

琴「！ 侮辱です」

権十郎「良いか、戦場にそなたのような美しい女は、毒じゃ。なぜか分かるまい」

琴「……」  
権十郎「厳しい戦場で男が女を見る。心が乱される。郷に帰りたくなる。正しい判断が  
できなくなる。勝てる戦さも勝てなくなる」

琴「……」  
権十郎「此度の戦は負けられぬ。それを理解せぬ限り、これ以上戦さに加えるわけには  
いかん」

琴、じつと考える。と、懐剣を取り出し、  
琴、自らの頬に大きく傷をつける。

菅「！ なんと」

権十郎「菅！ 止めよ」

菅、なおも乳房に傷をつけようとする  
琴を必死で止める。

菅「何をするのだ！」

琴「戦さに行けぬ器量なら、行ける器量にするまで！  
乳房が邪魔なら切り落とす！

お離しくだされ！」

菅「御家老」

権十郎「（琴をじつと見て）」

菅「御家老！」

権十郎「……強情じゃのう。早く帰って戦さの  
支度をせい」

琴「ありがとうございます！  
と、平伏する琴。」

### ○ 新徴組宿営

琴、戦さ支度をしている。

鏡に映った自分の姿をマジマジと見つめる。と、怒ったように晒しで胸をギューッと締めつける。

### ○ 鳥海山登山口

草深い山道を登っていく隊士たち。

その中に琴の姿がある。ふと、足元の  
花に目を止める琴。が、山頂を見上げると、再び登っていく。

○ 山道

斥候のものが男を連れてきている。近

林「矢島の様子を聞きたい」

木こり「（恐る恐る）山道に兵はいねえ。矢

島は百宅に兵が出張っている」

山田「城は？ 城はどうだ」

木こり「城は、手薄だ」

× × ×

大熊や男たちがへばって休む中、琴が  
黙々と登っていく。

○ 河原宿

鳥海山の頂が見える。

隊士たちが休んでいる中、じつと頂を  
見上げる琴。

中川「（来て）お前も物好きなやつだな」

琴「性分ゆえ、致し方ございません」

中川「これからの戦さはどうなるか分からん。

いつかのように俺も良之助も助けに行ける

とは限らん。命を惜しめ、中澤」

鳥海山の頂に雲がかかっていく。

○ 山道

濃い霧がかかっている。風も強い。

飛ばされぬように必死に山肌に食らい  
ついている隊士たち。

大熊「これは生涯ただ一度遭難する難儀だ！」

濡れた岩場にバランスを崩す琴。さつ  
と良之助が琴の手を掴む。

○ 大物忌神社・夜

まだ残雪が残る山頂の神社。御堂が仮  
の宿舎だが、全員は入れず、多くは外  
で野営である。

野営の支度をしている琴。

玉城がやってくる。

玉城「琴、お前は御堂の中で休め」

琴「私はここで十分です。中の男臭さはかな

玉城「いません。ご老体こそ中でお休みください」  
と、二人笑う。

○ 同・野営・夜

いつしか霧が晴れて星空が見えている。  
眠れない琴が夜空を見上げている。

と、隣に良之助が来て座る。

良之助「足が冷とうて眠れん。どうした？」

琴「星が」

二人、しばし無言で夜空を見上げる。

琴「姉上たちのことを覚えておいでですか」

良之助「なんだ藪から棒に」

琴「最近ふと思いつたのです。私たちの代わ

りに売られていった姉上たち」

良之助「俺も小さかったからな」

琴「どこにいるか、ご存知ですか」

良之助「しらん。生きているのか、死んでい

るのかもしらん。案外、金持ちの旦那に見

初められて、幸せに暮らしてるぜ」

琴「私が生まれて来なければ、姉上たちは売

られずに済んだのでしょうか」

良之助「あの頃は飢饉で父上もお苦しかった

のだ。俺たちだって、同じさ」

琴「父上が私を大事にしてくれたのは、姉上

たちへの罪滅ぼしだったんじゃないか」

良之助「考えすぎだ」

琴「姉上たちへの懺悔のつもりだったんじゃないか

：だから、姉上たちの分まで強く

生きねばならない。私は、父上にそう教わ

った気がするんです」

良之助「（立ち上がる）寝るぞ、琴。明日は

戦場だ。少しでも体力を温存するんだ。生

きねばならんのなら、眠るんだ」

琴「もう少しだけ、星をみています」

良之助「いいか、琴。こっから先は、負ける

ことは死ぬことだ。何があっても俺に構う

な。琴、行けるなら、先に行け」

良之助、去っていく。

○ 同・朝  
快晴。寒い。ぶるぶる震えながら寢床から出てくる琴。  
大熊「中澤、お前も小便か」  
琴「私は寒いのだ」

○ 舍利坂  
隊士たちが急な斜面を降りてくる。  
隊士の一人がズルズル滑っていくのをみんなが支える。

○ 賽の河原  
荒涼とした景色の中、進む一行。  
さすがに疲労の色が見える。

○ 祓川  
眼下に鬱蒼とした樹海が見える。  
林「この森を抜ければ矢島だ」  
琴の顔に緊張が走る。

○ 樹海  
ゆつくりと進む一行。  
と、突如銃声が森に響き渡る。  
足を止める一同。と、先を進んでいた斥候が走って戻ってくる。  
山田「いかでした」  
斥候「矢島の物見が」  
山田「捕り逃したのか」  
斥候「申し訳ありません」  
林「知らせが届かぬうちに乗り込むぞ」  
一同、歩を早める。

○ 分かれ道  
道案内の木こりが説明している。  
木こり「こつちが街道、矢島の中心に出る。  
で、ここを行けば裏手に回る」  
林「ご苦労だった」  
山田、木こりに褒美を渡す。  
× × ×

林が指示を出す。  
林「正面は玉城隊に任せる。あくまで陽動だ。  
無理をするな」

玉城「承知」  
林「我らはこの間道を進む」

× × ×  
琴が玉城と話している。

玉城「私は死ぬために剣を教えた訳ではない。  
矢島で逢おう」

琴「はい。御武運を」

○ 間道

進む林たち一行。

林「急げ！ 今ならまだ矢島は空だ！」  
琴たち、大木をよじ登る。

○ 街道

玉城たちが進む。

と、敵方から撃ちかかってくる。  
玉城「玉城たち、素早く物陰に隠れる。」

と、銃を構えると攻撃にかかる。

○ 愛染長坂

林たち、城を見下ろす高台へ出る。

山田「見ろ！ 城だ！」

すでに市街戦が始まっているのが見える。  
眼下はすぐ城だ。侍屋敷に物見が立っているのが見える。

林「まずはあの侍屋敷を撃て」

隊士が進み出て、侍屋敷に撃ちかける。  
何人かが倒れる。すぐに向こうからも反撃が開始される。

山田「当たるなよ！」

林「次はあの寺に火をかける」

琴が行きかけるのを、良之助が制して、  
良之助「ここは俺たちに任せろ」  
と、良之助と中川が飛び出していく。

○ 竜源寺

銃撃の中、を駆け抜ける良之助たち。隊士の一人が、寺に火をかける。みるみる燃え上がっていく寺。

中川「長居は無用だ」

と、退却しようとする、背後から銃撃を受ける。中川たちも反撃をする。

良之助「あつちに逃げろ」

良之助「あつちが銃で次々に敵を仕留めていく。

良之助「みんな早く行け！ここは任せろ」

良之助「懸命に応戦するが、激しい銃

撃に撃ち抜かれ、どうと倒れる。

中川「良之助！」

と、中川戻ってきて、良之助を抱えて退却する。

○ 愛染長坂

伝令が来る。

伝令「中澤良之助被弾しました！生死不明！（と戻っていく）」

山田が琴を見る。

琴「（グツと堪えて）私は大丈夫です！」

と、突如近くに砲弾が落ちてくる。

一発、二発、三発。見ると向こうの丘に砲台が見える。

林「山田、あの砲台を黙らせろ！」

山田が駆け出す。

山田「続け！」

と、琴と大熊も山田に続いて駆け出す。

○ 山道

駆ける決死隊。

大熊「いいか、とにかく俺の近くにいろ、そうすれば弾には当たらん！」

琴、うなずく。

○ 崖

砲台までの崖をよじ登る決死隊一行。と、上から銃撃を受け、弾がそばをか

山田「援護しろ！」

下にいる隊士が援護射撃をする。

山田「琴、大熊らが必死に崖を登る。

山田「怯むな！進め！」

激しくなる銃撃。

琴「かなり突っ込んでいく。大熊がそ

れについて登っていく。あと一歩で登

り切るその時、琴のすぐ真上の崖の上

から兵士が顔を出した。

兵士は銃を向けている。

琴「一瞬気づくのが遅れた。

兵士「引き金を引く。

と、琴の前に盾になるように大熊が立

ちふさがった。大熊を貫く銃弾。

琴「大熊！」

大熊「俺といるとお前に弾は当たらんのだ」

琴「大熊！」

琴「頭上を見る。兵士の銃は旧式で必

死に弾を込めている。琴、駆け上がり、

兵士を斬り伏せる。

○ 街道

玉城達が戦っている。

激しい抵抗に押され気味である。

○ 丘の上

山田たちが兵士たちと切り結んでいる。

琴「誰でもいい！大砲を奪え！」

山田「誰でもいい！大砲の兵に切りつける。大砲

の射手を倒す琴。

隊士「大砲とった！」

隊士たちから歓声が上がる。

山田「城を狙え！」

隊士が大砲を城に向ける。

○ 街道

玉城たちが激しく戦っている。



と、砲台の大砲が城を狙い撃った。  
城に火の手が上がる。  
玉城「見ろ！ 城に火の手が上がった！」  
と、玉城も銃撃を受けて倒れる。  
相原「御指南役殿！」  
玉城「大丈夫だ！ もう一息だ！ 撃て！  
撃ち続ける！」  
城に立て続けに大砲が打ち込まれる。  
それを見て、矢島兵が退却していく。  
相原「逃げて行くぞ！」  
小倉「勝ったぞ！」  
こちらも歓声上がる。  
燃え上がる矢島城。

○ 駐屯地

運び込まれる良之助。中川がついてくる。琴が駆け寄る。

琴「兄上！」

中川「大丈夫だ。肩を撃ち抜かれたが、幸い弾が貫通してな」

と、怪我をした玉城が支えられてくる。そこへ、布をかけられた大熊が運び込まれてくる。

中川「これは、誰だ……」

琴「大熊です……」  
琴と中川、沈痛な面持ち。

○ 同・本陣・夜

伝令が書状を持ってきている。  
読んでいる林の手が震えている。

山田「何と？」

林「……長岡が、降伏した」

山田「！ か、か、河合継之助殿は！？」  
林「足を撃たれた傷が元で……」

○ 同・兵舎・夜

隊士たちが並んでいる。  
林が険しい表情で話している。

林「長岡がいなくなつた今、越後口は丸裸同然だ。我らはこれより越後口に引き返し、

新政府軍の侵攻を食い止める」  
山田「怪我をしたものは当地に残し、戦えるもののみ明朝出立する！」  
兵士たちに疲れの色が見える。

○ 同・保養所・夜

包帯を巻かれて臥せている良之助。  
琴がそばについている。

良之助「：：行くのか」

琴「はい」

良之助「俺は：：見ての通りだ。すまん」

琴「兄上、もしも私が死んだら、母上に謝っ

ておいていただきたいのです」

良之助「嫌だ。そんなことは、自分で言え」

○ 同・朝

新徴組が越後口へ出発する。  
彼らを見送る良之助、玉城。

○ 中村・新政府軍本陣

参謀大山格之助（47）以下、新政府軍  
首脳が軍議を行っている。末席に高良  
がいる。

大山「矢島から、第四軍が越後口に引き返し  
てきおった」

高良「大山殿、新徴組です」

大山「高良を見る。」

大山「高良はよう知っておろうの」

高良「手強うござる。油断なされませぬよう」

○ 堀切峠陣地

突貫工事で砦を築いている隊士たち。  
琴が大きな丸太を担いでいる。途中、  
思わず足を止めてしまいが、齒を食い  
しばり再び歩き出す。

○ 中村

新徴組斥候が偵察にきている。  
斥候、異様な光景に息を飲む。そこに  
は薩摩の黒毛兵、長州の白毛兵、土佐



士たちが次々に撃たれていく。

陣地内が浮き足立つ。

山田「静まれ！物陰に隠れろ！」

林「どこからだ？」

小倉「日本国山からです！」

と、山田が動く。

山田「今すぐ裏手に回る」

山田の決死隊が発する。その中に琴の姿もある。

○裏手山道

道もない草深い山道を切り開いていく。

山田「急げ！」

琴「先に見てまいります！」

山田「草をかき分けて先に進んでいく。」

山田「気をつける！」

○日本国山

最新式銃でつるべ撃ちにする薩摩兵。

高良「休むな！撃ち続ける！」

眼下の陣地で新徴組隊士がバタバタと倒れていく。

琴、頂上にとりついた。見ると薩摩の兵隊たちが見える。琴、銃を構えて、

黒毛の指揮官を狙う。引き金にかかると、彼がこちら

を向いた。高良である。

琴、撃てない。

と、後から隊士がきて、銃を構える。彼らは迷うことなく引き金を引く。

背後から銃撃を受けて振り返る高良。と、銃を構えている琴に気づく。

琴、高良と目が合う。

山田「あの黒毛の頭を狙え！」

山田「あの黒毛の頭を狙え！」

新徴組の銃撃。

×

×

×

高良「ここまでだ！ 無駄死をするな！」

薩摩兵、退却を始める。

× × ×  
かちどきをあげる一同。  
が、琴の表情は晴れない。

○ 中村・新政府軍本陣・夜

大山の軍議が行われている。戻ったま

高良「峠の陣地は殊の外堅固です。このまま

突破するのは犠牲が大きすぎます。まずは

関川を攻略し、峠の兵力を分散するのがよ

ろしいかと存じます」

大山「しかし、関川に庄内軍がおる」

高良「兵力はこちらが上、峠の隘路より、平

地の方が我が軍には有利です」

○ 関川・翌日

新政府軍の大軍がなだれ込んでくる。

新政府軍が新式大砲を撃つ。

薩摩藩指揮官「撃て！ 撃て！」

× × ×

庄内軍が敗走を始める。

庄内藩指揮官「無念じゃ！」

銃撃と砲撃の中を逃げていく。

○ 堀切峠陣地

銃撃戦が行われている中、伝令からの

報告を受ける林。

林「関川が落ちただと！？」

伝令「すぐに奪還作戦を行う為、援軍をお出

しいただきますい」

林「バカを申せ！ こちらもギリギリでやっ

ておるんじゃない」

山田「林殿！ 関川が落ちればここも危うい。

ここは再び我ら決死隊が関川を取り戻して

見せます」

○ 山道

駆け下りる山田の決死隊。琴、中川が参加している。と、藪の中から斥候が顔を出す。

○ 関川・新政府軍本陣

高良「とうとう燻り出されてきおった」

○ 藪の中

山田隊が潜んでいる。

山田「ここからだ」と守りが手薄だ。一気に駆け下りるぞ！」  
斜面を駆け下りる一同。

○ 関川

突入する山田隊。

しかし、隠れていた薩摩兵が現れて、銃撃を開始する。

山田「しまった！伏兵だ！」

高良が指揮をしている。一人残らず仕

留める！」  
激しい銃撃。

山田「退却だ！一旦引け！」

山田隊が退却する。激しい銃撃。

一人、また一人と撃たれる。山田が殿となつて奮戦するが、銃弾が山田を貫く。倒れる山田。

琴「山田殿！」

琴が戻ってきて、山田を抱える。

高良「いまだ！囲め！」

薩摩兵たちが飛び出していく。

中川たちは藪の中に逃げ込んでいく。琴も山田を抱えて藪の中へ。

○ 林の中

山田の傷が深い。琴が傷をきつく縛る。中川たちが合流してくる。

中川「山田様、お怪我は」

山田「大丈夫だ。それよりも、とにかく全員

生きて庄内軍本隊に合流しろ」

中川「しかし、ここからでは関川を突破せね

ば本隊には合流できません」

山田「俺には構うな。このままここにおいて

も、いざれ薩摩に捕まるだけだ」

中川「いざとなれば、みなここで討ち死にす

る覚悟です」

山田「バカモン！死ぬことを考えて、勝て

る戦さがあるものか。なんとか、突破する

策を考えろ」

琴「琴、じつと考えている。

琴「山田殿、中川殿、私に策がございます」

○ 関川

新政府軍の守備隊が守りを固めている。

と、兵士1が怪訝な顔をしてある方向

を見ている。

兵士2「どうした」

兵士1「あ、あれ」

と、見ると走り去っていく人影だ。

しかしそれはただの人影ではない。襦

袢一つの半裸の女だ。

兵士1「女だ。は、裸の女だ！」

女、振り返る。琴だ。琴、新政府軍を

挑発するように逃げていく。

兵士1「お、追え！」

と、兵士たちが琴を追いかけようとす

た時、背後から激しい射撃とともに、

新徴組隊士が走ってくる。

中川「走れ！突破しろ！」

怒涛のように駆けてくる決死隊たち。

勢いに飲まれ、逃げ出す新政府軍兵士。

○ 関川・裏手

高良が報告を受けている。

高良「抜かれただと？なぜだ！」

兵士1「女が、裸の女に気を取られているうちに、後ろから」  
高良「女？ ……どけ！」  
高良、そばにあった馬に乗り、駆け出していく。

○ 関川中心地

琴と中川たちが隠れている。

琴、すでに衣服を着ている。

中川「琴、助かった。しかし、お前」

琴「いいのです。男でも女でも構わない。私

自身が強くあればよい」

中川「そうだな。見ろ、本隊までもうすぐだ」

と、隊士の一人がきて、

隊士「山田殿たちがまだ合流していません」

琴と中川が顔を見合わせる。

琴「私が見てまいります」

○ 街道

山田を抱えた一行が逃げている。

山田「捨て置き！ 俺に構わず逃げろ！」

○ 林の中

琴が駆ける。

○ 街道

高良が馬で駆けてくる。

山田を守る隊士たち、それに気づき、

銃を構えて撃つ。

高良、馬を撃たれて転げ落ちる。

山田「撃て！」

隊士たち必死に引き金を引く。

高良、たまらず藪の中に逃げ込む。

○ 林の中

銃声がする。

琴、銃声のする方へ走っていく。

○ 同・広場

少し開けた所に出る琴。銃声が止んで



いる。道に迷う琴。  
と、突如藪から人が飛び出して来る。  
琴、とつさに銃を構える。向こうも銃  
を構えた

琴「！」

高良「！」

二人、お互いに気づく。風の音。

二人とも相手の様子を伺っている。

と、高良、銃を捨てて刀を抜いた。

琴も銃を捨てて刀を抜く。

二人が無言で向き合う。

遠く大砲の音がする。風の音。

ゆっくりと間合いを測る二人。

先に高良が仕掛けた。琴、あつという

間に間を詰められ、肩を斬られる。琴、

すんでの所で身を引く。

再び、対峙する二人。互いの動きを見

逃すまいとジッと様子を窺っている。

琴が仕掛けた。

琴、踏み込む。高良が弾く。再び琴、

踏み込む。高良が避ける。琴、なおも

踏み込んでいく。琴、高良の腕に切り

つける。高良、腕を斬られて引く。

高良、ギロリと琴を睨みつけると「チ

エストー！」と叫んで猛攻を開始する。

琴、懸命に受ける。高良、なおも打ち

込む。高良、琴めがけて突進、琴がバ

ランスを崩した。

高良「もらった！」

高良、刀を振り上げる。琴はそのまま

地面に転がりこむと、高良の刀を蹴っ

て弾き、下から高良に刃を突き上げる。

静寂。風の音。

高良、微笑むとバタツと倒れる。

琴、高良を抱きかかえる。

高良「貴様、強くなつたな」

琴「：高良殿」

高良「いつかの約束を果たさねばな」

琴「約束？」

高良「お前が勝ったら、俺の正義を教えてや

ると言っただろう」

琴「高良殿、そんなことはもう」

高良「聞いてくれ：俺にも妹がいた。気立  
てのいい娘でな。俺に似ず、器量がよかつ  
た。ある日、ふとした弾みで上士の侍にぶ  
つかった。そいつは問答無用で妹を無礼打  
ちに斬って捨てた。虫の居所が悪かったら  
しい。が、俺らみたいな下級の侍は、上士  
の侍には逆らえぬ。斬られた妹は死に損だ。  
俺はそれでも藩に掛け合った。けど、俺ら  
みたいな虫ケラがいくら吠えても無意味だ  
った。その頃だ、清河八郎殿の浪士組の話  
を聞いたのは：」

琴「早く傷の手当てを」

高良「無用だ。俺は今でも間違ったことをし  
たとは思っていない。けどな、一つだけ読  
み違えた。貴様だ」

琴「：」

高良「女など強くなれぬと思っていた。だか  
ら、俺は女が死なないような世の中を作る  
うと思っただけ、そうではないのだな。  
女が強く生きられる世界が、あればよかつ  
たのだな：」

琴「もう何もおっしゃいますな」

高良「強くなれ。もつと、もつと強くなれ。」

俺は：その時：：」

高良、息を引き取る。

琴「：高良殿！」

琴、高良の衣服を整える。と、名もな  
き白い花が咲いているのを見つける。  
琴、花を手折ると、高良の胸に捧げる。  
そして、静かに合掌する。  
再び銃声が聞こえてくる。

○ 関川中心部

中川「中川たちと山田たちが合流している。」

中川「見ろ！ 琴だ」

琴がやってくる。

中川「（斬られた肩を見て）大丈夫か」  
琴「大丈夫です。まだ戦えます！」

中川「よし、本隊まで一気に駆け抜けるぞ！」  
と、その時、街道の向こうから法螺貝の音が聞こえてくる。

中川「本隊からだ」

山田「（ハツとして）これは」

法螺貝の悲しい音。

中川「山田殿」

山田「（嗚咽して）こ、降伏だ……庄内藩が降伏したんだ……」

一同、胸に込み上げてくるものを必死で堪える。

琴、呆然として空を見上げる。

と、小鳥が飛んできて、近くの枝に止まる。

小鳥は小さく、ピピピと鳴いた。

琴、その時、憑き物が落ちたように、手から刀を離す。

刀は音もなく、地面に突き刺さった。

泣く男たちが、が、琴は、ほっとしたように笑みを浮かべている。

法螺貝の音が、長く悲しく響いている。

### ○ 鶴岡城・大手門

新政府軍が入場していく。

### ○ 同・大広間

藩主忠篤公、権十郎、菅ら庄内藩重鎮

たちが平伏している。

上座に大柄な男が座っている。西郷隆

盛（44）である。

西郷「見事な明け渡しでござる。庄内藩はよ

う戦いもしたのう」

### ○ 墓地

真新しい卒塔婆の前で手を合わせる琴。

「大熊敬助」「山田官司」の名がある。

### ○ 山道

快晴。鶴岡城が見える。

旅姿の琴と良之助、見下ろしている。

良之助「いいのか、みんなに会わなくて」

琴「逃げて出るのです。顔向けなど、できません……」

良之助「……そうだな」

琴「兄上」

二人、ひっそりと去っていく。

○ 上州・上原村・道場

激しい試合が行われている。

T 「明治十三年 上州・上原村」

一方的な試合だ。一方が片方をコテン

パンに叩きのめしている。

中年夫婦が顔をしかめている。ハラハ

ラと見ている琴の母・みね（60）。

一方の剣士がたまらず降参する。

立会いの男「それまで！」

中年夫婦が負けた剣士に駆け寄る。

勝った剣士が面を取る。琴である。

中年妻「大丈夫ですか！ 貞九郎！」

琴、何事もなかったように一礼すると、

道場を出ていく。みね、すまなそうに

頭をさげると琴の後を追う。

○ 道場・外

琴を追いかけるみね。

みね「琴！ 何もあんたあそこまで叩かなく

ても！ あんたの婿さんになるかもしれないね

えてのに」

琴「弱い婿などいりません」

と、行ってしまおう。

○ 中澤家・外

みねが頭を何度も何度も下げている。

みね「申し訳ねえす」

中年妻「何もあんなに殴らなくたって！ あ

んな年増こつちから願い下げですよ！」

みね「ほんに申し訳ねえ」

プrippり怒って帰っていく貞九郎親子。

○ 同・仏間

父の位牌に手を合わせる琴。

良之助「また嫁に行きそびれたか」  
琴「振り返る。背広に口ひげを生やし  
た良之助が立っている。」  
良之助「年増のおてんばなんて、笑えないぜ」  
琴「笑われなくて結構でした」  
良之助「今更いくら強くなたって、親父は  
喜んではおくれんぞ。早う嫁にいけ」  
琴「余計なお世話です。節操なく薩長の禄を  
食む兄上に言われたくありません」  
良之助「その禄で飯を食っておるんだろうが、  
お前は。人の何倍も」  
琴「良之助にべーと舌を出すと、部屋  
を出ていく。」  
良之助「（琴の背中に）もう飯食わさんぞ！」

○ 道

かつと栄之進がやってくる。  
かつが小さな女の子の手を引いている。  
栄之進「確か、こっちは女の子の手を引いている。  
かつ「違う違う。さっきのおばさんが水車の  
小屋を真っ直ぐって。何聞いてたの」  
栄之進「そうだったっけか？」

○ 中澤家・玄関

琴「かつ！ 栄之進殿！ お久しゅうござい  
ます！」  
かつがいたずらっぽく笑っている。  
栄之進が会釈をする。  
琴「（少女をみて）この子は」  
かつ「私たちの子、琴子っていうの。私は嫌  
だったけど、この人が頑固でさ」  
栄之進「強い子に育って欲しくって」  
琴「（琴子に）あなたも琴ですか」  
琴子「恥ずかしそうに栄之進の背中に  
隠れる。」

○ 同・座敷・夜

良之助も混じって談笑している。

榮之進は奥で琴子を寝かしつけている。かつ「何にも言わずに突然いなくなっちゃうんですもの。もう絶対許してあげないって思ってたわ」

琴「その節は：：申し訳ない」

良之助「中川は元氣か」

かつ「すっかりお百姓さん。綺麗なお嫁さんもらってね。デレデレしちゃって、みたら

れないの」

榮之進「（奥から戻ってきて）寝たよ」

琴子、スヤスヤ寝ている。

良之助「榮之進もすっかり父親だな」

かつ「この人商売下手で、秩禄処分の一時金、みんなおかしな商売で使い果たしちゃって、

せめて子守りくらいやってもらわないと」

榮之進「：：面目ない」

かつ「私の髪結いの稼ぎが命綱ですものね」

琴「かつは相変わらずですね」

かつ「と、かつ、琴の髪を触って、もうちよ

つとおしやれにしたら？」

琴「興味ないっていったらう」

かつ「私が髪梳いてあげる」

○ 同・縁側・夜

琴の髪を梳くかつ。座敷から良之助と榮之進の笑い声が聞こえてくる。こちら

は静かな女たちの時間だ。

かつ「琴ちゃん、変なこと聞いていい？」

琴「答えられることにしてくださいよ」

かつ「琴ちゃん、本当はうちの人のこと、好き

きだったんじゃない？」

琴「榮之進殿ですか？ 榮之進殿は、親友で

す。好きとか嫌いとかじゃない」

かつ「じゃあ、他に誰か好きだった人は？」

琴「あの頃はそんなこと考えたこともなかつたな。強くなることに夢中で：：でも」

かつ「でも、なあに？」

琴「いや、その：：どうしても勝ちたいと思う相手はいた」

かつ「（笑って）それって好きだったってことなんじゃない？」

琴「違いますよ」

かつ「そうよ」

かつ「そういうんじゃないよ」

その人には勝てたの？」

（笑って）それで、

琴、微笑んで答えない。

かつ「あ、白髪（と、抜く）」

琴「痛っ」

かつ「またあつた（と、抜く）」

琴「痛っ」

かつ、琴の髪をとかしている。

夜が更けていく。

### ○ 同・朝

かつと栄之進と琴子が寝ている。

みねが寝ている。

良之助がいびきをかいている。

琴の寝床だけが空である。

### ○ 道場

身支度を整えた琴が神棚に頭を下げる。

そして、ゆっくりと刀を正眼に構える。

その眼はまだ侍の眼だ。

ゆっくりと暗転。

### ○ 黒バツク

T「中澤琴にその後勝つものは一人もいず、

生涯独身を貫いた。

琴は剣の腕を磨き、酒を呑み、詩を吟じ、

何よりも家族を愛した。

晩年、「中澤の鬼ババア」と近所の子供

に恐れられた琴は、昭和二年、親類縁者に

見守られながら、大往生を遂げた。

享年 八十二

終